

笞とお灸と晒し刑

～因習の島で躰けられた
娘の悦虐回想



原 案：PIXIVリクエスト（匿名様）

小説化：濠門長恭

表紙絵：藤間慎三

目次

折檻されるための帰省.....	- 2 -
被虐と羞辱への目覚め.....	- 8 -
第二次性徴への戸惑い.....	- 20 -
年少者からかわれて.....	- 23 -
宿題ボイコットで孤立.....	- 32 -
父様からの過酷な折檻.....	- 39 -
自慰封じには淫核お灸.....	- 47 -
後輩と濃密な百合遊戯.....	- 58 -
有刺鉄線笞と肛門お灸.....	- 64 -
神社で巫女様と同じ罰.....	- 77 -
雨中で屈辱の全裸折檻.....	- 86 -
濡らしてしまう晒し刑.....	- 100 -
修学旅行で一大不祥事.....	- 113 -
全校集会で冤罪の折檻.....	- 120 -
肛門串刺し全裸晒し刑.....	- 132 -
帰省したら纏めて折檻.....	- 140 -
赤い縄で結ばれた二人.....	- 159 -
瑠璃を待つ最後の折檻.....	- 169 -
後書き.....	- 173 -

この小説はフィクションです。登場する人物、組織、地名、事件、年齢は架空のものであり、実在する如何なる事象とも関係はありません。

折檻されるための帰省

きたかり
北下里島行きのフェリー。ルリは二等寝台です。上下二段のカプセルホテルといえば、都会の人には分かりやすいですね。

手荷物を収納スペースへ収めると、アコーディオンカーテンを開けて、はしたないです。下着になって、まだ午後九時前ですけれど毛布に潜り込みました。

午後九時に出港して、翌朝の五時に^{しずら}静羅島へ寄港。六時に出港して、北下里島まで一時間です。

フェリーは朝晩の二便だけですが、北下里島の人口は八千人、静羅島が三千人ですから、客室は年中ガラガラです。

ルリが夜行便を利用する理由は二つあります。ひとつは、九時間の長旅が退屈だからです。ケイタイでインターネットを閲覧できるのは港の近くだけだし、通信費がとんでもないことになります。

もうひとつの理由は、朝から晩まで、たっぷり折檻していただくためです。中途半端なところで「続きは明日にします」なんてことになって、縛られたまま土蔵の中に放置……されるのも、素敵ですけれど。

ルリは来月には二十歳になります。成人したら、親や巫女さんに折檻をいただくことはなくなります。結婚して旦那様がいらっしゃれば……それぞれの家庭の方針ですわね。この年末の帰省が、瑠璃が母様に（たぶん……ではなく、きっと絶対に、母様の後で父様にも）折檻していただく最後の機会です。

今年も親の言い付けを無視して、夏休みには帰省しませんでした。それなのに何度か外泊していたことは、寮母さんから連絡が行っているでしょう。

しかも……純潔を守っているかを確かめられて……母様は狂乱するのでしょうか、激怒す

るでしょうか。

去年は、夏休みに帰省しなかったのと、フシダラを連想させるようなお手紙をわざと書いたのとで、三日間も寝込むほど、厳しい折檻をいただきました。たくさん謝りましたが、「二度としません」とだけは言いませんでした。

だから、今年の夏休みも帰省をブッチしたのです。本土に『留学』して、はしたない言葉を覚えてしまいました。

本土で覚えた悪い言葉よりも、去年の折檻の後で父様から受けた純潔教育の実践の方が、もしかしたら、ずっといけないことだったかもしれません。強姦されそうになったときに、お口とお尻を使って身を護ることを教えていただいたのです。どちらも初めてのことで、お尻の穴は凄く痛くて熱くて、泣いてしまいました。

……ほんとうに本当のことを言うと、ルリはお尻叩きが怖いのです。叩かれているときに痛いだけでなく、折檻専用のお尻杓文字で普通に叩かれても、次の日くらいまでは疼いて、椅子に座るのがつらいです。

お尻杓文字というのは、お尻叩き専用の木の板のことです。形も大きさも、杓文字というよりは羽子板に似ています。平手でのお尻叩きよりも厳しいのですが、女の子にしか使われません。男の子は、もっと厳しい籐笞です。もちろん女の子にだって籐笞が使われることもありますけれど、女の子は男の子よりも厳格に躰けられるので、折檻をいただく機会がずっと多いのです。一日置きに折檻をしても大丈夫なくらいの軽いお道具が必要なのです。

籐笞は、本当に厳しいのですよ。力いっぱい叩かれると肌が破れますし、そうになると熱を出して寝込むこともあります。何日ものあいだ、椅子に座れなくなります。それでも学校は休ませてもらえません。空気の椅子で耐えられなくなったら、先生のお許しをいただいて、教室の後ろに立って授業を受けるのです。

とてもつらいし恥ずかしいし、たいていの女の子は泣きじゃくります。男の子は、歯を食い縛りながら涙をこぼします。

ルリは月島家の子、しかも跡継ぎですから、籐笥もしょっちゅうでした。それでも、泣きじゃくったことはありません。空気椅子の間は耐えることに精一杯でしたけれど、いよいよ我慢できなくなって教室の後ろに立つと、ちょっぴり気が緩んで……胸がキュウンと捻じれて、腰の奥が熱くなってきました。こらえた涙が割れ目から滲むもありました。

あ……エンジンの音が微かに聞こえてきました。いよいよ出港です。

普通の人だったら気にならないくらいの振動をお尻に感じます。幼い頃から繰り返し叩かれてきて、本土で生まれ育った人たちよりもお尻の皮が厚くなっているはずなのに敏感なのは、お灸を据えられた痕が（一生）残っているせいです。お灸の痕そのものは神経も焼き切れていますが、治癒の段階で周辺に神経が密集するのだそうです。

折檻は、お尻叩きだけではありません。北下里島では、子持ちの家庭にはお灸が常備されているのです。新婚家庭の事情は、知りません。

北下里の人たちはみんな、このお灸の痕を誇りに思っています。年少の頃に、きちんとした躰を受けていた勲章なのです。左右がきれいに対称になっていれば、お母様が几帳面な性格だと分かります。

こういったことは、島の中だけでしか通用しない話です。世間一般の基準では、年頃の女の子のお尻に黒い癍痕が並んでいるなんてみっともないですし、折檻のお灸痕だなんて知られたら、ギャクタイとかDVとか——週刊誌あたりがスキャンダルにするでしょう。

これが男性の場合だったら、

「まるで戦前の封建教育だな。でも、それで非行やイジメがゼロだというのは、今の民主的教育というやつは、かえって子供をスポイルしているのかも知れないなあ」となるのですから、不思議です。

ルリは本土の大学へ進学して勉強したかったし、母様も理由は違っても進学に賛成してくださいました。でも、父様は大反対でした。ルリのせいで北下里島の風習が弾圧されたりしたら、島の皆様にもご先祖様にも申し開きできません。

バストイレ付きワンルームマンションとかなら、その心配はなくなりますけれど、結婚

前の娘に独り暮らしを許すなんて、とんでもないことです。

島から出て高等教育を受ける女子は、ごく限られています。たいていは名家か、そうでなくても裕福な家の子ですから、月城の家ともお付き合いがあります。

二年先輩の^{こだかたけよ}戸高竹代さんという人が学んでいる学校には女子寮があつて共同風呂もあるけれど、他人が入ったお湯に浸かるなんて不潔だと考える子もいるので、シャワールームが完備していると、教えてくれました。

ルリも、そこへ進学しました。おかげで、ルリは潔癖症の女の子と見られて、男女共学でもあまりナンパをされずに済みました。

これは、北下里の女は身持ちが堅いくせに情が深過ぎる（お灸痕を見たからには責任を取ってね）という評判もあると思います。

ルリが女性としては背の高い方（163センチ）とか、スリム（52キロでW60、Bは企業秘密）なのにヒップだけ大きい（90）という難点は、卵顔で二重瞼で清楚な黒のロングヘアが差し引きでプラスのはずです。

ヒップが発育しているのは、お尻叩きのせいです。お灸痕と合わせて、躰の行き届いた貞操堅固な女性の象徴ですけど、この魅力を分かってくださるのは、北下里島の殿方だけです。

もっとも。きちんと並んだお灸の痕が美德の象徴だといっても、程度問題です。せいぜい四つまでです。それ以上は、男だったらとんでもない悪ガキ、女だったら阿婆擦れだった証拠です。

月城の姓を名乗る家だったら、痕が四つの娘でも嫁に迎えません。

ルリの婿に来てくださる殿方でしたら、北の月城家と^{ほうじょう}北城村の漁師さんたちを率いるだけの度量が求められますから、四つくらいが好ましいかもしれませんけど。

北の月城家といいましたが、北下里島には、三つの月城家があります。^{とうじょう}東城村の網元が東の月城家で、^{なんじょう}南城村の網元が南の月城家です。どの月城家も、月中市に本邸を構えています。三つの月城家は家系では同格です。この他に、海産物加工業者が直接契約して

いる漁師さんたちも、三割くらいはいらっしゃいます。

海産物加工業者の方々も、月城家に（経済力では）勝るとも（血筋としても）劣らない名家です。名家の娘には、お灸痕が二つというのが必要にして十分な条件です。

母様もそれは良く考えてくださって、本当なら六つも八つもお灸が必要なフシダラな行ないが露見したときも、二か所へ立て続けに据えてくださいました。

女の子がもっとも厳しく罰せられるのは、盗みでも暴力でもありません。フシダラです。だから、お尻の二か所だけではなく、別の——絶対に他人には見えない場所にも据えてくださいました。

あら、エンジンの振動が大きくなりました。港から離れてスピードを上げたのですね。

お灸のことを考えて、お股が切なくなってきたところですから、ちょうど良いタイミングです。前から考えていたアイデアを実行してみます。

肩凝り（するくらいには、バストだってあるんです！）のボール回転式塗り薬。容器の首が斜めに曲がっています。ボールが上を向くように、硬いマットの上に寝かせて。ルリは俯せになって、容器が倒れないように太腿で挟んで、ボールの部分をショーツの上からお股へ当てます。

んしょ、んしょ……ボールをクリトリスに押し付けて。

「らめえええ……」

凄く快感に叫びそうになって、横へ転がって逃げました。

クリトリスの皮に包まれた実核にも、小さなお灸の痕があるのです。ちょっと盛り上がっていて、お尻と同じで、その部分は感覚が鈍いのですが、周辺が鋭敏になっています。乳首の何倍も繊細で敏感な突起が、さらに感じやすくなっているのです。

もしも、ショーツを脱いで包皮をめくって直接に当てていたら、そうでなくても、マットでなく硬い床の上でもろに振動を受けていたら……きっと一瞬で絶頂を突き抜けて、悶絶していたのではないのでしょうか。

ルリがこの凄まじい快感に目覚めたのは、去年の夏でした。

クリトリスの快感そのものは、ずっと前から知っていました。割れ目の上端に隠れている小さなオチンチンみたいな突起に気づいて、弄るとビリビリ電気が奔って気持ち良くなると分かって。でも本能的に、それがフシダラなことだと悟って、疚しさに苛まれながら自慰を繰り返して。とうとう母様に見つかって、そこにお灸を据えられたのです。

火傷が治るまでの三週間ほどは、パンツを穿くのもつらかったです。その後も、触ると電気が奔る代わりにビキビキと引き攣れるような痛みが奔って。それ以来、おいたは……減多にになりました。

でも去年の夏、同室だった一年先輩の恋バナを聞かされているうちに、クリ逝きとかナカ逝きなんて生々しい言葉が出て来て、ルリは昔のことを思い出して——以前よりずっと過敏になっている自分を発見したのです。ビキビキとビリビリがまぜこぜになって、痛気持ち良かったのです。いえ、気持ち良いなんてありきたりな言葉では追いつきません。【快感】と、太い括弧で囲みたいです。できれば、四倍角の文字で特筆したいです。

今にして思えば、愛ちゃんとの二人おいたは、この【快感】の片鱗はありましたけれど、悪いことをしているという背徳感が大きかったのです。身体に染み込む【快感】ではなかったから、会えなくなっても心の寂しさ以上の欲求は生じなかったのです。

この、全身に染み込む【快感】を、入学までに発見しなくて良かったです。こんなのに夢中になっていたら、受験勉強が手に付かなかったでしょう。

そして、女子寮が相部屋になっていることと、ドアに鍵が無いことにも感謝しなければなりません。

本当にその気になれば、方法は幾らでもあるでしょうけれど、ルリはそこまで淫らでもフシダラでもありません。

ですから、たまに耳にするピンクローターなんて、興味もありません。

そういうことは、結婚してから、旦那様に開発していただくのが良いと思っています。今は、まだ痛いだけ……いえ、何でもありません。

早く寝てしまいましょう。

明日は「ただいま」を言い終わらないうちから母様を卒倒させて、問答無用で土蔵へ連れて行かれて、折檻台に縛り付けられて、これまでに体験したことのない苛烈な折檻をしていただくのですから。

被虐と羞辱への目覚め

年少時代のルリは、自分で言うのも恥ずかしいですけど、模範的な良い子でした。幼稚園のときに、もう自分の名前を月城瑠璃と、漢字で書けていました。学校へ上がると、ほとんどの教科が5で、4なのは図工と音楽だけでした。

もちろん、ルリも完全無欠ではありませんから、お友達と喧嘩をしたり（取っ組み合いなんかはしませんでしたよ）、お友達と一緒に買い食いのスリルを味わったりもしました。狭い島内ですし、学校からも連絡が行きますから、すべて両親には筒抜け。お尻叩きもお灸も人並みに（？）受けていました。スカートめくりをされて、反射的に男の子を平手打ちにしたときは、折檻用のお尻杓文字ではなく、ハート形をした布団叩きで、お尻が真っ赤になるまで叩いていただいた上に、反省として庭の門の前に二時間だけ『お立たされ』しました。

『お立たされ』は、必ず全裸です。腕は後ろで右手で左肘を、左手で右肘をつかんでいなければなりません。水を張ったバケツを跨いで立つのです。この姿勢を絶対に崩してはなりません。通りがかった人が、まだ心から反省していないと見抜いて折檻をしてくださっても、です。

『お立たされ』をしている子を月に数度は見かけますが、たいていは近隣の人や通りすがりの人たちから、追加の折檻をいただいていた。お尻はじゅうぶん過ぎるくらいに折檻をいただいているので、女の子なら乳首にデコピン、男の子ならオチンチンにデコピンが相場です。

ルリは月城家の子ですから、皆様遠慮をなさいます。おかげで（ただ二回の例外を除いて）、追加の折檻を受けた記憶はありません。でも、バケツの水面を覗き込まれたことはありました。絶対に隠しておかなければならない部分を、自分でも見えない角度から覗き込まれるなんて、全身に毛虫が這い回っているようなおぞましさを感じます。

でも、制服を着るようになる以前の『お立たされ』は、スカートめくりへの反撃を咎められた、その一回だけでした。つまり二十世紀のルリは、模範的なお嬢様でした……とも、言えませんわね。ルリが悪い子になったきっかけは、最終学年の秋でしたから、まだ二十世紀です。

たしか十月でした。その日は憑代神社で見習巫女の昇格修行があるのでルリも、二つ違いの裕二と年子の茉莉と一緒に、母様に連れられて朝から見学に行きました。

昇格修行がどのようなものであるかは、噂で知っていました。すごく恐ろしい修行です。それを、姫子お姉様が受けるというので、家を出た時から、不安と同情とに胸を締め付けられていました。

お姉様と言っても、血縁ではないです。苗字は入来院といいますから、月城と島津に次ぐ名家の子です。

月城は、鎌倉の時代にまで遡れる土着の豪族でしたが、島津と入来院は明治維新後に薩摩藩から入植した武士の末裔です。月城神社の巫女には、この三家の他には西郷家と樺山家の者しかねない決まりがあります。

そういう名家同士のつながりもありますけれど、姫子お姉様はルリと三つしか歳が違わないので、神社へ遊びに行くと、お話をしてくださったり神様からのお下がり或少しだけ分けてくださったり、いろいろと可愛がっていただきました。お仕事中ですから、かくれんぼとかケンケンパを一緒に遊んではくさいませんでしたけれど。

神社の境内には、もう何百人もが集まっていました。お母様に連れられた年少者の姿が目立ちますが、年長の男性も少なくありません。御神木のまわりに大きく張り巡らされた

七五三縄の中に立ち入ろうとする不心得者はいません。

やがて、神主様に先導されて五人の巫女さんが登場しました。禰宜というのでしたっけ、水色の袴に白装束の男性が二人、七五三縄の一角を開いて、六人がその中に入りました。

御神木の手前には、折檻台が置かれています。単純に形容すれば背もたれの無い公園のベンチですが、痛くてもがく子を縦にも横にも縛り付けられるように、短い木の棒が縁のあちこちから水平に突き出しています。

公園のベンチと言いましたが、実は公園にも折檻台が設置されています。自宅に設備できない貧乏な家の子にも、折檻を受ける権利と義務を平等に与えるためです。もちろん、ルリ家の土蔵には立派な折檻台がありますよ。縄で縛り付けるのではなく、皮膚を傷付けないように革ベルトで拘束するようになっています。

でも、神社の折檻台は昔ながらの素朴な造りです。百年以上も使われて何百人もの見習巫女さんと中習巫女さんの脂汗と涙と（きっと、血も）が染み込んで、黒光りしています。

折檻台の前に立った姫子お姉様の両側から、中習巫女さん二人が衣装を脱がしていきます。

水垢離をするときと同じで、下着は着けていません。胸を曝されお股を暴かれても、両手はきちんと垂らしたままです。

全裸になった姫子お姉様が、折檻台の前で見学者の皆様に正面を向いて座りました。正座ですが、地面に着いた膝は三十度を開いています。踵を立ててお尻を乗せ、前かがみです。ヤマト座りというそうです。

お股は、小さい子と同じようにつつるです。これは、巫女さんだけに限りません。普通のお尻叩きやお灸では済まないくらい悪いこと、具体的にはフシダラなことをしたときは、ここにもお灸をいただきます。私は良い子ですという証のために、毛が生えてくる年齢になっても剃っているのです。

もちろん、ルリもつつるですすべでしたわよ。

折檻には、それで罪を帳消しにするという意味もあります。折檻を受けてじゅうぶんに

反省をしたら、その子が犯した罪は無かったことにしてもらえます。相身互い身ということもありますから、お友達が離れていったりはしません。

でも、フシダラのお灸は……男の子だったら、女の子から敬遠されるようになりますが、同じ男の子からは、尊敬（？）されるのだとか。女の子は逆で、男の子からもてはやされるようになるそうです。ルリは実例を知りませんでしたから、あくまでも噂です。

お姉様は両手を後ろへ回して、右手で左肘を左手で右肘を握りました。『お立たされ』の姿勢と同じです。この形でじっとしているくらいなら、縄で縛られた方が気楽だとルリは思ったものですが、姫子お姉様は、そんな不心得なことはお考えになっていないと思います。

神主さんが御幣に御神酒を振りかけて、バッサバッサとお祓いをしました。

「かけまくもかしこくも、なんとかかんとか……」

祝詞も御経も、聴いていてさっぱり分かりません。ところどころで「いりきいんひめこ、ここに……」とか「わがみにいたみをきざみ……」とか聴き取れる部分もありました。

巫女さんは、特に厳しい折檻には立ち会うことがありますし、気の弱いお母様に代わって籐笥を振るうこともあります。こういうふうに叩かれたら、こういうふうにと痛いと、それを知る修行なのです。

同時に、見学に連れて来られた年少者たちは、「悪い子には、こんなに厳しい折檻をするのですよ」とお母様から無言のうちに脅されるのです。

ルリは、姫子お姉様が厳しい折檻をいただくということだけは知っていましたが、それが具体的にどのようなものかまでは、知りませんでした。

お祓いが終わると、いよいよ折檻です。姫子お姉様は折檻台に上がって御神木に向かい、折檻台の幅方向へ身体を伸べてうずくまりました。両手は折檻台の長手方向へ広げて、両肩を折檻台に押し付けます。両脚を開いてお尻を突き上げました。同じお尻折檻でも、俯せになるより厳しくて羞ずかしい姿勢です。

割れ目の両側のふっくらした盛り上がりが、お尻越しにはっきり見えています。

二人の巫女さんが、姫子お姉様のお尻の両側に立ちました。

その手に握られている折檻のお道具を見てルリは、ずうんと身体が地面にめり込んでいくようなショックを受けました。だって、ひとりの巫女さんは籐笞を持ってらっしゃいます。

お尻叩きで、もっとも軽いのは平手です。その次がお尻杓文字。お尻杓文字は重たいしリーチが長くなるから、威力は大きいのですが、平手より面積が広いからお尻全体に力が分散します。清々しいような痛みです。

次に重たいのは布団叩きです。竹尺を使う家庭もあります。お尻杓文字よりさらにリーチが長くなるし、細い部分に力が集中しますから、斬り付けられるような鋭い痛みです。

籐笞はさらに力が集中します。布団叩きで泣いたルリには、その痛さは想像もできませんでした。

ところが、もう一人の巫女さんは革バンドを握ってらっしゃいます。細いけれど分厚くて、表面が凸凹しています。折檻専用のお道具ではありませんが、お尻への折檻としては最も厳しいと言われています。ルリが知っている範囲では、バンドで叩かれた子はいませんでした。

二人の巫女さんが同時に腕を振り上げました。無言で、姫子お姉様のお尻に打ち下ろします。

ビシッ！

籐笞が一文字に食い込んでお尻がひしゃげるのが、はっきりと見えました。

バッチイン！

一拍遅れて革バンドが、籐笞が打った部分を正確に打ち据えました。お尻全体が、ぶるんと震えました。

「ありがとうございます」

姫子お姉様が、大きな声でおっしゃいました。

普通は一発ごとに「ごめんなさい」と言うのが、折檻していただくときのお作法です。

叫ぶことで、悪いことをしたから罰を受けているんだという自覚が生まれて、同時に、一発ずつが罪滅ぼしなんだという安心感につながるのです。

姫子お姉様は悪いことをしていないのに、修行のために折檻を受けているのですから、「ありがとうございます」になるのです。

ビシイッ！ バッチイン！

「ありがとうございます」

ビシイッ！ バッチイン！

「ありがとうございます」

見る見るうちに、お尻が真っ赤に腫れ上がっていきます。

みんな、シンとして見守っています。小さな子の半分くらいは、口をへの字に曲げて涙を流しています。泣き声をあげて、お母様に口をふさがれる子もいます。

十何発かの後で、革バンドの巫女さんが、姫子お姉様の真後ろからお股を覗き込みました。

難しい顔をして背を伸ばすと、神主様に近寄って、内緒話を始めました。

巫女さんがいなくなったので、ルリにも姫子お姉様のお股の奥まで見えました。割れ目がすこし開いて、なんだかぬめっています。透明な粘り気のある蜜のような雫が、糸を引いて垂れています。

神主様が、姫子お姉様の後ろに立ちました。祝詞を唱えながら、下から掬い上げるようにして、御幣でお股を払いました。

それから、御幣を折檻用の革バンドに持ち替えて、装束の袂を二の腕までまくりました。

見学の、特に男の人たちがざわつきます。

神主様が左手で袂を押さえながら、右腕を真下から真上へ振り抜きました。

バダイン！

「きゃああああっ……痛いっ！」

姫子お姉様が両手でお股を庇って、横ざまに倒れました。

四人の巫女さんが群がって、姫子お姉様を起こしにかかりました。

「ごめんなさい……赦してください。オマンコは、いやああ！」

それまでの凜々しかった巫女さんの面影もない取り乱し方です。

見ていて、胸がキュウンと捻じられました。腰の奥がカアッと熱くなりました。これはなんだろうと、不思議に思う暇ありません。

「いやっ……ごめんなさい！」

もがいても、相手は四人で、しかも年上。姫子お姉様はあっという間に、折檻を受ける姿勢に押さえ込まれました。

元の姿勢とは違っています。もっと脚を開いて、両手は足の横に重ねられて、手首と足首を縄でひとまとめに括られて、折檻台の縁から突き出ている木の棒に縛り付けられました。

「いやああ！ オマンコは赦して……きひいっ！」

巫女さんに乳首を抓られて、お姉様が甲高い悲鳴をあげました。

「汚い言葉を口にしてはいけません。次に言ったら、口に詰め物をします」

もう一人の巫女さんも、反対側から手を差し入れて、もう一方の乳首を抓りました。

「痛い痛い……ごめんなさい……」

お姉様は泣きじゃくっています。

神主様が、また真後ろに立って……

ぶん、バッチイイン！

風を切る唸りと共に、革バンドでお股を薙ぎ上げました。

「ぎゃあああああっ……！」

お姉様は絶叫して、全身がクニャッと潰れたように、ルリに見えました。

実際には、縛られているので姿勢は変わっていません。ただ、大声で泣き続けています。

聞いていて、ルリは頭がクラクラしてきました。胸がいつそう捻じられ、腰の奥が疼きました。

巫女さんがしゃがんで、お姉様のお股を覗き込みました。それから……（ええっ？）割れ目に指を挿れて、すぐに抜きましたけれど。

「破れてはおりません」

神主様に向かって、そう告げました。ルリには、何のことか分かりませんでしたが、神主様は頷きました。

「御神託は降^{くだ}った」

厳かにおっしゃいます。

「引き続き、姫子に修行を許す。されど、この上なくつらいものになるぞ。良いな、姫子？」

お姉様の返事は聞こえませんでした。神主様は満足そうに頷きました。

巫女を志して破門されたりしたら——そんな前例は知りませんが、島から追い出されるだろうとは、当時のルリでも想像に難くありませんでした。

姫子お姉様の、次の試練が始まります。お姉様は折檻台の長手方向に俯せになって、手足を伸ばして縛り付けられました。さっき暴れたせいだと思います。

縛っていただくというのは、実は甘やかしてもらっているのだと、ルリは考えています。痛いことや羞ずかしいことを、自分の意思で身体を動かさずに耐えるのは、とてもつらいのですから。

ルリは、また目を瞞ってしまいました。だって、お姉様の丸いお尻の上に、アボロチョコほどもある大きな^{もぐさ}艾が左右に三つずつ、合計六つも並べられたのです。あんなに大きくては、一生消えない痕が一発で残ります。

二人の巫女さんが手分けして、お線香ではなくライターを使って、六つのお灸に火を点けました。

「くうう……」

お姉様が呻きます。

お灸は半分以上が燃えて火が肌に迫ってからが熱いのですが、ここまで大きいと、最初から熱いのでしょう。

「ひいひいひい……熱い。熱いよおお」

お股に折檻をいただいて気力を挫かれたのか、ルリの想像以上にお灸が熱いのか、いつもシャンとしている巫女さんらしくもなく泣いています。

でも、いつもよりお姉様を身近に感じられるような気もしました。

とはいえ、さすがに巫女さんです。手首を縛っている縄をつかんで肘を突っ張ったりはしても、艾の載っているお尻は、ピクリとも動かしません。

普通の子だと、暴れて艾を振り落としたりしたら、もっと大きなお灸を据えられると分かっていても、つい藻掻いてしまいます。優しいお母様ですと、渾身の力で腰を押さえ付けてくださいます。ルリの母様はとても厳格なので、そんなふうに甘やかされたことは一度もありません。でも、ルリは艾を落としたことは一度もありません。

お尻叩きのすぐ後のお灸は、ものすごく熱くて痛いです。しかも、普通の五倍くらいもありそうな大きなお灸。それをこらえているのですから、お姉様は立派です。

泣き声が悲鳴に変わったところで、お灸の煙は消えました。

これでお尻への折檻は終わったと、ルリはほっとしました。それはその通りだったのですが、お灸はまだ終わっていませんでした。

お姉様は仰向けにされて、また折檻台に縛り付けられたのです。しかも、脚を広げた「人」の字形です。

また、見学の人たちがざわめきました。お姉様くらいの年齢だったら叢になっている部分に、剃ってつるつるになっている部分に、アボロチョコ大の艾が二つ、割れ目を挟むように並べられたのです。

「そこは赦してください。お嫁に行けなくなっちゃいます！」

そこへのお灸は、「私はフシダラな女です」と顔に書くのと同じくらいの効果があります。巫女さんを引退して、毛で隠せるようになっても、こんなに多くの目撃者がいるのですから……あ、でも。フシダラの罰ではなくて修行だと分かっているのですから、だいじょうぶですよ。と、当時は思っていました。

「心配は要らぬ。女房を折檻するのが好きな亭主は、少なくないぞ」

神主様が、そうおっしゃると、男の人たちの半分くらいが、わざとらしく嗤ったりニヤついたりしました。

当時のルリには意味が分かりませんでしたが、もちろん今では理解しています。ルリはそういう殿方をお嬢さんに迎える運命だということも。

そこは鞭打たれて腫れてはいないから、お尻よりは耐えやすかったのでしょう。悲鳴は上げず、静かに啜り泣いていました。熱いとか痛いよりも、羞ずかしいんだなと、ルリは思いました。でも、なんだか甘えたような泣き方だなとは、子供心にも思ったものでした。

ようやくルリは、弟と妹の様子に気をまわすくらいに、心が落ち着いてきました。

二人は対照的でした。

裕二は五つ年上のお姉さんの裸を見まいとしてか、硬い表情で俯いていました。

茉莉は身を乗り出すようにして、自分の二倍ちかく歳が離れているお姉さんを見詰めていました。ぽかんと口を半開きにして、目もとろんとしています。

あっと思いました。ルリも同じような表情をしていたのではないかしら。

けれど、そのことについて深く考えられる状態ではありませんでした。

——お股の上のお灸も燃え尽きて、ようやく折檻は終わりました。でも、まだ反省の時間が残っています。修行ですから、反省ではなく瞑想でしょうか。

これまでの修行が厳しかったせいでしょう、神主様はまた姫子お姉様を甘やかしてくださいました。背中で交差させた腕を縄で縛り、開いた両足も足首に縄を巻いて折檻台の脚につないでくださったのです。これだと、努力しないでも反省の姿勢を保っていられます。

折檻台が邪魔でバケツを置けないので、大きな鏡が、脚の間からすこし突き出る形で、折檻台の上に置かれました。

姫子お姉様は、お股の上へのお灸が終わってから、ずっと甘えたような声で泣き続けてらっしゃいました。

涙を流してらっしゃいましたけれど、俯いているので、頬から顎へ伝った涙は胸へこぼ

れて、おへソへ届く前には乾いています。それなのに鏡の表面には、粘っこい涙がポタポタと滴っています。

「帰りますよ」

母様が裕二と茉莉の手を引いて、神事に背を向けました。

「何をしているの、瑠璃さん。帰るのです」

禰宜さんと巫女さんが手分けして、七五三縄を取り外しに掛かっています。ということは、普通の『お立たされ』と同じで、いえ、普通なら近所の人と通りすがりの人だけですが、この場には子供連れでない年長者だけでも何十人と集まっています。その全員というわけでもないでしょうが、ずいぶんと多くの人から、追加の折檻をいただくことになるでしょう。

女の子は乳首へのデコピンが多いですが、姫子お姉様は、もう胸が膨らんでいます。そういう子には、おっぱいビンタというものもあるそうです。

ルリの胸も、わずかですが膨らみかけています。机の角にぶつただけでも、肘よりも痛いのです。姫子お姉様は、また泣き叫ぶでしょうか。それとも巫女さんとして、毅然とこらえるでしょうか。どちらであっても見届けたいと思いました。

「何をしているの、瑠璃さん。早くお出でなさい」

親の言い付けには従わなければなりません。跡目を継ぐルリにだけは、母様は『さん』を付けて呼んでくださいますが、それは関係ないのです。

ルリは姫子お姉様に背を向けて、母様を追いました。お股のあたりが気持ち悪くて歩きづらいのに気が付きました。きっと、姫子お姉様と同じ粘っこい涙をルリもこぼしているんだわと直感しました。

お股がぬるぬると冷たいのは、あまり気になりませんでした。もっと他のことに気を奪われていたのです。

ルリもあんなふうに厳しく折檻をいただいていた。お姉様を見ているうちに、そう思っている自分に気づいたのでした。胸のキュウンの正体は、これでした。

家の中で、お灸のときは母様の膝の上、お尻叩きはルリのベッドの上。学校でも生徒指導室。そんな生温い折檻ではなくて、青空の下で大勢の人に見守られながら、姫子お姉様みたいに惨めに泣き叫ぶまで折檻をいただきたい。そんな馬鹿げたことを夢見ていたのです。

——家へ帰ってからも、姫子お姉様のことが気掛かりでした。

折檻の後の『お立たされ』は、うんと小さな子だと一時間未満の場合もありますが、たいていは二時間以上です。昇格修行だと、夜中まで続きます。折檻が朝からお昼前までですから、『お立たされ』は半日にも及びます。

ですから、午後三時までに宿題を片付けて。友達の家へ行ってくると母様に嘘をついて、こっそり神社へ行きました。

前よりも狭く、七五三縄が張り直されていました。十人くらいの男の人が取り囲んで、ただ見物しています。

七五三縄を張り直す前に、ものすごくたくさん、追加の折檻を受けたのでしょう。胸の膨らみが赤く腫れています。傘の骨のように広がる青黒い痣は指の跡でしょう。乳首も腐りかけたサクランボみたいに赤黒く膨れています。そして膝の高さにある鏡は、ちゃんと映らないくらいガビガビになっていました。

姫子お姉様は、ふらふらしながら、それでも倒れずに立ってらっしゃいました。天を仰いで、口を半開きにして涎を口角に引いて……薄眼を明けてらっしゃるように見えました。

普段のキリリとしたお姉様とは別人のような、無残なお姿です。惨めで無様です。

それなのに、ルリは……お姉様を羨ましく思ったのです。

なぜかは、自分にも理解できませんでした。『正』と『反』とがひとつに止揚される弁証法を学問として学んだのは、それから八年も後のことでした。姫子お姉様の境地を我が身で知ったのは、もっと早かったですけれど。

第二次性徴への戸惑い

姫子お姉様とは、あまり遊ばなくなりました。厳しい折檻を受けているところをルリが見学していたのは、お姉様もご存じです。何度か目が合いましたもの。それで、お互いに気まづくなった——というわけではありません。

折檻していただいているところを見られるのは、この島ではお互い様です。ですから、見たり見られたりしても、お友達はお友達です。毛が生える部分へのお灸だけは、すこし違いますけれど。

お姉様への折檻は修行でした。でも、一度に六つもお灸を据えられたり、毛を剃っている部分にまでというのは……その前の巫女さんと神主様の様子からすると、修行中にお姉様が何か不始末をして、それでお仕置のための折檻になってしまったようにも思えます。

いえ、これも疎遠になった理由ではありません。

ルリは、お姉様を羨ましく思いました。と同時に、ルリとは違う世界へ行ってしまうようにも感じていました。ルリが歩いている道の三年先にお姉様がいらっしゃる。そう思っていたのに、突然にお姉様だけが別の道へ行ってしまった。そんな感じでした。そして、お姉様が歩まれる道へ行ってはいけないのだと、これは心の動きではなく、幼い頃から無言のうちに母様から躰けられてきた道徳でした。

当時でもルリは、お姉様の修行の中に性的なニュアンスを嗅ぎつけていたのだと、今になってみれば、思い当たります。

その性的なニュアンスに係わる変化が、ルリの身にも生じました。なぜか、そのことを知られたくない相手の筆頭がお姉様なのでした。

お姉様の修行を見学してから二週間くらい経ったときだったと記憶しています。

お股の上あたりがかすかに黒ずんできたのを、お風呂で気づきました。目を近づけて観

察すると、薄くて細くて短い、産毛のようなものが疎らに散らばっていました。

最初に思ったのは「剃らなくてはいけない」ということです。洗面所には、父様が使ってらっしゃるT字形の剃刀があります。でも、勝手に使ってはいけないし、ルリがこっそり使った後で、それを父様のお顔に当てるなんて、とんでもないことです。

ルリは母様に相談しました。お股に関する事柄は他人と話してはいけないと、これも幼いうちに母様から躰けられていましたけれど、もちろん父様も母様も他人ではありません。父様とお話するのは羞ずかしいですけれど。

「剃ってはいけません」

お母様は、そうおっしゃいました。生やしっぱなしにしておきなさいという意味ではありません。繰り返して剃っていると毛が太くなって、どんどん汚くなっていくのだそうです。

お母様から専用の毛抜きをいただきました。ぼうぼうになってから抜くのは気が遠くなる作業ですが、今ならわりと簡単に綺麗にできます。これからはお風呂の都度によく見て、見つかるはしから引き抜いていきなさいと、母様に教わりました。

さっそく、翌日から始めたのですけれど、抜くときにはチクッと痛いです。でも、お尻叩きほどは痛くありません。そして、根気よく抜いているうちに、なんだか気持ち良くなってきました。お股の奥がジインと熱く痺れた感じになって……神社からの帰り道と同じような、ねばっこい蜜のようなものが割れ目から滲み出てきます。

毛を抜くのは母様の言い付けですけれど、それで気持ち良くなるのは内緒にしておかねばならないと、当時のルリは幼いながらも本能的に悟っていました。

母様にだって打ち明けられない秘密です。姫子お姉様にも言えるわけがありません。

あっという間に年末となって、最後の冬休みが過ぎ、卒業して、進学して。

その春に、ルリは初潮を迎えました。赤茶色の染みがパンツに着いたのですが、粘っこい蜜で染みが着くことがときどきあったので、たまたま蜜に色が着いたのかなくらいで、

あまり気にはしませんでした。

いつもと同じように、こっそり洗って絞って、それから洗濯のお手伝いをしました。

ところが四週間後に、今度はもっと赤っぽい大きな染みが着いたので、不安になって、もしかしたら進学後初めての折檻をいただくかもしれないと怯えながら（ちょっぴり期待しながら）母様に打ち明けました。

そこで、生理の対処法を教わりました。身体が成長すれば女の子はそうなるというだけで、月経の意味までは教わりませんでした。こちらは、自分で図書室の本を調べて――「赤ちゃんを迎える準備」を身体がしているのだと分かりました。どうやったら赤ちゃんを迎えられるかは、その二年後にまめたお友達から教わりました。

「人間が、そんな破廉恥なことをするはずがないでしょ」と反発して、しばらく仲たがいをしましたけれど、そういう目で本を読むと理解しやすい部分があちこちにあって、最後にはルリがお友達に謝って仲直りしました。

五年後の今ではインターネットで検索すれば、キーワードを工夫すれば、そういった知識もわりと簡単に手に入りますが、当時はパソコンもインターネットも、一部マニアのひとたちの玩具でしかなかったのです。今だって、携帯電話でインターネットを見るのは面倒くさいし、パケット料金がすごいことになるので、親に説明が苦しいです。

お話がそれちゃいました。

母様から教わったのは、ナブキンの使い方でした。

「タンポンとかいって、血が出てくる穴に詰物をする生理用品もありますが、絶対に使ってはいけませんよ」

穴は処女膜というもので護られていて、タンポンはそれを破ってしまう恐れがあるのだそうです。処女膜が破れていると、お嬢さんを迎えられないと脅されました。ルリ個人にも一大事です。弟の裕二を跡継ぎにすると、連綿と続いてきた長子相続の伝統に背くことになって、月城の家系にも傷がつきます。

もちろん、今では生理の本当の意味も知っていますし、おそらく月城家の伝統も守れる

と思います。でも、母様がそれを納得してくださるのは、姫子お姉様が受けた折檻よりも厳しく罰していただいてからのことになるでしょうけれど。

年少者にかからかわれて

どうにも寝付けません。船の揺れとエンジンの振動のせいもありますけれど、まだ十時にもなっていないのですから、当然かもしれません。夜更かしも、親元を離れて暮らすようになってからの悪い習慣です。でも、仕方のないことです。寮ではルームメイトと暮らしているのです。お互いの生活リズムを妥協しなければなりません。

ケイタイは……もう、圏外ですわね。ちょっと寂しく感じます。ルリも、本土の悪い習慣にスポイルされてきました。

ルリと同年代の方たちの中には、朝起きると新聞代わりに『ヤッホーニュース』をサーフィンして、『ニイチャンネル』や『W I X I』で本名も知らない友達と挨拶を交わして、電車の中でも授業中でもWEB小説を読んだりゲームをしたり、寝るまでケイタイを手放さないテクノ依存症の方も珍しくありません。

学問は疎かになりますし、高額のパケット料金を払うためにアルバイトを増やすなんて本末転倒ですし、仕送りを増やしてもらうなんて親不孝の極みです。

さすがにルリは、そこまでひどくはありません。アルバイトもおねだりも、厳しい折檻です。

でも、フェリーの中だけでなく北下里島でもケイタイが使えないのは……去年は禁断症状なんか起きませんでした。それどころではなかったからです。今年も同じでしょう。

島全体が圏外というのは、今どき珍しいそうです。

ケイタイというのはテレビやインターネットとは違って、数百メートル単位で中継アンテナを置かないとつながらないそうです。既存のビルの屋上を間借りして、アンテナを立

ています。すこし田舎へ行くと、もっと強力なアンテナの鉄塔が、それでも数キロおきに林立しています。

でも北下里島では、通信会社にビルや土地を貸す人はいません。移動しながら電話できるだけならともかく、ネット掲示板にあれこれ書き込まれたり写メられたりしたら、ちょっと都合の悪いことがありますもの。

寝付けないし、手持無沙汰だし……ちょっとだけおいたをしましょうか。ルリは、そんなはしたない真似はしませんけれど、ルームメイトの^{かなさとちえ}金里知絵さんは、消灯後に毛布を頭からかぶって……さいわい、個室の船室ですから、その必要はありません。でも、声には気をつけなければ。

ショーツを新しいのに書き替えて。古いのはビニール袋へ挿れる前に……レイプ同然の初体験を思い出します。

こうやって無理矢理に声を封じられると、安心できます。ルリの（秘密にしていた）願いが叶って、初めて折檻をいただいている現場を他人に見られたときだって、母様がそうしてくださっていたら、あんなに羞ずかしい思いをしなくて済んだのに。

二度目の生理が終わった頃から、ほんとうに泣き喚くくらいの折檻をされてみたいという、そんな思いが募るようになりました。といっても、わざと悪いことをして月城家の跡取娘の評判を落としたいくはないです。

学校でも、クラス全員の信任を受けて学級委員長に選ばれています。男子は三人の候補者から^{さいごうありひで}西郷有秀くんが、四十人中二十八票でした。

もちろん、学校の外でも同じです。

お話は変わらないのですが。この学校にも本土の影響が押し寄せてきます。スカート丈が、そのひとつでした。

三年生は学校で膝上十センチくらい、二年生は七センチまでというのが、先生が黙認してくださる限界でした。一年生は五センチでも、先生の虫の居所が悪いと折檻をいただき

ます。

通学中は、もうちょっとだけ短くしていました。

ルリは品行方正なお嬢様でしたから、校則を額面通りに守っていました。五月の連休明けに膝を露出して登校したら、

「うわあ。瑠璃様、イメチェンなさったの？」

その子は、しっかり膝上五センチでした。

あ、その子は街の商店の娘さんです。皆様、ルリとお話しなされるときは、おのずと上品になられます。

学校でも学校の外でも、冒険はできません。でも、家の中なら。

ルリは思い切って、膝上十五センチに挑みました。姿見に映る自分が、別人のように見えました。当時の身長は百五十七センチで背は高い方でしたから、けっこうバランス良く太腿が露出しています。

不思議です。だって、つい三か月前には、これが普段のスカート丈だったのに。ちょっと子供っぽくはなくて、コギャルぽいです。セーラー服のマジックです。

ここまでは、折檻とは関係のない好奇心でしたけれど。もっと、うんと短くしたら、お尻叩きに便利かなと思い付きました。

ウエストをさらに何回も巻いて、姿見に映る自分のショーツが見えるところまで引き上げました。自分から見えるのですから、他人から見られます。正面からは逆三角形の頂点がちょっとだけでも、後ろ姿を映したら、^{クロッチ}股布の縫い目まで露出していました。上体を水平まで倒すと、予想通りにショーツが剥き出しになりました。

そこで閃きました。すぐには着替えず、そのまま居間へ行ったのです。父様は漁業組合の理事ですから、平日のお昼はお仕事です。カーポートに車がありません。

裕二と茉莉は、お友達と一緒に庭で遊んでいます。

ルリのスカート丈を見て、母様は一瞬ぼかんとされました。それから、当然ですがきつい声でお叱りになりました。

「なんですか、そのスカートは。破廉恥な真似はおよしなさい」

ちょっとふざけてみただけですと謝ってスカートを巻き下げれば、いつも通りに母様の膝の上で平手打ちか、厳しくても四つん這いでお尻杓文字をせいぜい五発でおしまいでしょう。自分の部屋でベッドに俯せて布団叩きをいただくところまではいきませんでしょうけれど。

「これくらい、三年生だったら普通です」

すぐにばれる嘘です。家の前は通学路になっています。朝晩に制服のミニスカートを見ては、『近頃の若い娘』のフシダラを嘆いてらっしゃるのですから。

「嘘おっしゃい」

聞いたことのない、厳しいだけでなく冷たい声で叱られました。

「恥ずかしい格好の娘さんばかりですが、下着を丸見えにしている人はいません。それに、瑠璃さんは一年生です。破廉恥な上級生の真似などしないでよろしいです」

「でも、ルリは学級委員長です。他の子に負けるわけにはいきません」

「瑠璃！」

母様はソファから立ち上がると、ルリの耳たぶを摘みました。いえ、抓っています。

「お仕置をされないと、分からないのですね」

耳たぶを引っ張られて、縁側へ連れ出されました。

庭で遊んでいた六人の子たちが、ルリを見上げます。

「そこで俯せになりなさい」

母様が、縁側の縁^{へり}へルリを押し付けました。折檻をしていただくときには、どれだけ厭だろうと内心で反発してしようと、従順にしていなければなりません。どんどん罰が厳しくなっていきます。

それに、今は——折檻をしていただきたくて、わざと悪い子ぶったのです。疚しさがありますから、さらに悪い子ぶるのは、母様に申し訳ないです。

ルリは、素直に俯せになりました。

「瑠璃さんが動かないように、みんなで見張っていてちょうだいね」

「はあい」

「ダルマさんが、こーろんだ！」

母様は、折檻のお道具を取りに行かれたのでしょうか。布団叩きでしょうか、籐笞でしょう。ルリは。籐笞でお尻を叩かれたことはないです。茉莉もです。

男の子の裕二は一度だけあります。一発目から、ぎんぎん泣きました。布団叩きの二倍は痛いと言っていました。熱こそ出しませんでしたが、翌日はずっと教室の後ろに立っていたそうです。

母様が戻ってらっしゃいました。

なあんだ、お尻杓文字です。幅十センチ長さ三十センチの分厚い木の板に握り柄が付いている、音だけが景気の良い虚仮威しです。

母様は庭へ降りて、お尻杓文字を真上へ振りかぶりました。

スパアン！

「きゃああっ……！？」

物凄く大きな音が鳴って、お尻に重たい激痛が奔りました。思わず、両手でお尻を庇いました。いつものお尻杓文字とは桁違いの痛さでした。

ああ、そうかと納得しました。

膝の上のお尻を叩くにしても、厳罰の四つん這い叩きにしても、肘から先だけで水平に叩きます。でも今は、腕の長さを全部使って、しかも打ち下ろしました。板の重みまで乗っています。

「瑠璃さん。手を降ろしなさい」

両手を身体の脇に垂らしました。

スパアン！

「ひいっ……！」

反射的に手が動いてしまいます。

「お姉ちゃんって、弱虫だなあ」

男の子が、さも馬鹿にしたように言いました。

裕二と茉莉も含めて六人の子たちは、折檻を見物しているのです。その場に居合わせたら、見てあげるのが、この島の礼儀です。月城家の子たちと遊ぶくらいですから、小さくても礼儀はきちんとしています。

でも、容赦はありません。この子たちでも、お尻杓文字くらいでは悲鳴も上げないでしょう。お姉ちゃんが悲鳴をあげてのたうち回るのが、無様に見えるのです。

三発目は、叩かれる前から全身を強張らせておいて、どうにか手の動きを封じました。

五発で、お尻杓文字は赦していただきました。でも、おしまいではありません。

「今のは、母様に嘘をついた罰です。次は、口答えをした罰です」

母様は籐笞を手にお持ちになりました。やはり、真上から打ち下ろします。

ぶゅん、バチイン！

「ごめんなさいっ！」

お作法通りに謝罪の言葉を口に出来ました。それだけ、痛さに余裕がありました。布団叩きよりは痛いけれど、鋭くて切れ味が良い——というのも、変な表現です。

ぶゅん、バチイン！

「ごめんなさいっ！」

打たれたところが、じいんと痺れます。次に打たれるまで、ずきずきと痛みます。

籐笞も五発で赦していただきました。

「次は、戯れとは言えフシダラな服装をした罰です。でも、困りましたわね」

最後の方は、独り言らしいです。

母様は庭の端のカーポートから、洗車用のホースを持って来られました。

「父様のベルトを勝手に使っては叱られますから、これで勘弁してあげます」

母様は、ルリのショーツに手をかけました。

「こんなに破れていては、もう捨てなければなりませんね」

ルリの足から引き抜いて、ルリに見せつけました。

進学してお姉さんになったお祝いだと、父様がプレゼントしてくださったショーツです。女兒のパンツより股割が大きくて丈は短いです。オヘソの下が、大きく露出しています。すごく大人っぽいです。キャラクターとか苺とか花柄ではなく、水色の横縞です。ルリのお気に入りでした。

それが、お尻の所が横に三か所も切れています。

母様は、ルリのショーツを縁側へ放りました。

「歯を食い縛りなさい」

母様はルリのお尻にホースの先端を乗せて、きっちり当たるように、立ち位置を調整されました。そして……

ぶうん、バヂイインン！

「きゃああああっ……！」

凄まじい衝撃でした。叫んだ後は息が詰まって、口をパクパクさせました。反射的にお尻を庇った手を元へ戻せません。

「もうしません。赦してください！」

泣きべそをかきながら、謝りました。「もうしません」というのは、とても重たい言葉です。もしも同じ過ちを繰り返したら、ずっとひどい折檻をされます。

母様は赦してくださいません。

「手をどけなさい」

ありったけの勇気が必要でした。

ぶうん、バヂイインン！

「痛い痛い痛いっ……！ ごめんなさい！ もうしません！」

「お姉ちゃん、弱虫だあ」

男の子ですから、裕二のお友達でしょう。クニャクニャ柔らかいホースで叩かれて、大袈裟だと思っているのでしょう。

でも、考えてみると。究極の折檻のズボンバンド（男物が決まりです）よりは、ホースの方が硬いと思います。そして、何倍も重たいのではないのでしょうか。

ぶうん、バヂイイン！

「痛い痛い痛い！ もうしません！ ごめんなさい……」

「これしきのことで弱音を吐くのですか。そんなことでは、月島の家を継ぐことなど適いませんよ」

それとこれとは関係ありません。でも、言い返したりはしません。

「お姉ちゃん、がんばってよお……」

茉莉まで泣きべそです。

「ぼく、バンドのお仕置だって泣かなかったぞ」

裕二のお友達が得意げに言いました。

バンドの折檻は、ルリくらいの歳になってからです。自慢できることではないですよ。お灸の痕だって四つはあることでしょう。

お姉ちゃんの弱虫、弱虫。男の子二人が囃し立てます。

四発目も五発目もルリは悲鳴をあげました。年下の子にからかわれて、悔しくて恥ずかしい思いをしました。

ホースの折檻も五発で、これでやっと赦してもらえました。でも、反省までは免除していただけませんでした。

反省の『お立たされ』は全裸が決まりですが、正面から割れ目が見える超ミニスカートのだけは脱がされませんでした。かえって羞ずかしいです。両手を後ろで水平に組んで、水を張ったバケツを跨ぎます。これも折檻の決まりを破って、二つ横に並べられました。それだけ大きく足を開かなければなりません。

すぐに、近隣の人たちが集まってきました。

「月島の跡継ぎお嬢さんがねえ。珍しいこともあるもんだね」

「何をしたの？」

質問には正直に答えなければなりません。

「こんなふうに、スカートをうんと短くしてみたんです」

ふざけただけで、こんな破廉恥な姿で通学したりはしない。そんな弁解は、しない方が
良いです。

「そりゃあ、仕方ないわね」

「だが、この腫れ具合はひどいな。何で叩かれたのかな」

「水撒きのホースです」

質問した男の人が、顔をしかめました。

「奥様も無茶をなさる」

「あの方は、ご自分が折檻されたことがないから」

「だったら、教育してあげるのが、和臣さんの務めだろうに」

和臣というのは、父様の名前です。

「本土から嫁いだ大学卒の嫁だから、甘やかし過ぎたんだな」

「今さら、四十幾つの年増を折檻する気にもなれんだろうしな」

母様は、本土から嫁いで来られました。お尻にお灸の痕はありません。でも、この島の
風習に馴染む努力をなさったのです。この方たちは、無神経だと思います。

それでも、ご自分が折檻をされた経験が無いので加減が分からずに、概ねは手ぬるいの
ですが、今のように厳し過ぎたりするのです。

厳しい折檻に憧れていたのですから、喜ばなければならないのでしょうけれど。あまり
に痛くて、胸キュウンも腰ゾクゾクも感じるどころではなかったです。

ですけれど。こうして、お尻の痛みを噛み締めていると、大勢の人たちに見られている
と、なんだか分からない感情が、じんわりと込み上げてくるのです。

宿題ボイコットで孤立

実はルリは、進学するまで学校で折檻をいただいたことがありませんでした。宿題やドリルは忘れずに提出していましたが、先生の言い付けに背いたこともありません。学校でお友達と喧嘩したことはありましたが、親に報告が行っただけで、先生からの折檻はありませんでした。月城家への遠慮があったのだと思います。

進学を機に、是非とも学校でクラスメートの前で先生から折檻をいただきたい。そんなことを一念発起したルリは、どこかおかしいのでしょうか。

家では折檻をいただくのは、ほとんどの場合が母様からでした。でも学校だと男の先生からいただくことになるでしょう。女の先生が少ないからですが、なぜか女の先生は島外出身者が多くて、なかなかこの島の風習になじんでくださらず、男の先生に折檻を任せってしまうからなのです。学校にまで巫女さんにお越し願うのは、宗教的中立性が破られるからとか——ニッキョウソからのお達しだそうです。

手加減はしていただきますが、やはり力の強い男の先生から折檻をいただくことを思うと、不安が先に立ちます。これまでの経験でルリは、痛いのはほんとうに怖いのですが、羞ずかしいのは……好きと言ってしまうと、ちょっと違いますけれど。胸がキュウンで腰がジンジンするのは事実です。粘っこい蜜でショーツがジクジクになることも珍しくありません。

それと、痛いのも……後で、疼きを噛み締めるのは、嫌いではありません。痛みが消えたずっと後でも、あのときは、あんなふうに厳しく折檻していただいたんだなと思い出すと、キュウンでジンジンです。

月城家の跡取娘の評判を落とさずに折檻をいただく方法はないかしらと、それで勉強がおろそかになったりはしませんでしたけれど。

そんなふうに関年間ずつと悶々としていましたけれど。進級して絶好の機会が訪れました。

数学の先生が変わったのです。須佐英人^{すさひでと}という先生で、仇名は『宿題の鬼』です。週三回の授業で、毎回ドリルが五枚と応用問題が三枚です。

「ゆとり教育になったって、円周率は約3.14159265じゃ」と、難しいことをおっしゃっていました。

ルリも数学は得意ではありませんが、一日平均四枚のプリントは、きちんと片付けていました。

ある日、劣等生の何人かが、とんでもないことを言い出しました。全員で宿題を忘れようというのです。提出しないのが数人だから折檻をいただくのです。赤信号みんなで渡れば怖くない——です。

賛成する人がどんどん増えて、クラスの多数決みたいな雰囲気になってしまいました。

「多数決なんだから、委員長も抜け駆けするなよ」

次の授業では、四十人中三十四人が提出しませんでした。

先生は真っ赤になって怒りましたけれど、まさか全員をお尻叩きしたら、授業が潰れます。先生は苦虫に噛み潰されたような顔をなさって授業をされて、やっぱり八枚の宿題を出されました。

次の授業は四十人全員が提出しませんでした。

「よし、分かった」

バンと、須佐先生は教卓に分厚いプリントの束を叩き付けました。

「今日は、三回分まとめて二十四枚の宿題だ」

ますます、全員でボイコットです。

「次は六時限目に授業をずらす。提出しなかった者は、何時まで掛かろうと、全員折檻だ」

折檻が終わるまで下校禁止だと、おっしゃいました。

「ただ、まあ……」

先生がプリントの山を手で押さえながら、ちょっと考え込みました。

「さすがに、多すぎる気もするな。よし、全部でなくても、構わんぞ」

やりました。大幅な譲歩（かなあ？）を引き出したのです。

「もし、全員が提出するなら、もっとも枚数の少ない者を一人だけ折檻する」

三回も授業を妨げたのだから、並大抵の折檻で済むと思うなよ——生徒一人ずつを睨み付けるようにして、そうおっしゃいました。

分厚いプリントの束を前から後ろへ配り終えると、授業はせずに教室から出て行かれました。

「どうするよ？」

「出さねえと全員か。あの剣幕だと本気だよな」

「みんなで一枚ずつで、どうかな」

「一番少ないやつって言ってたろ。全員が一番少ないってことになるんじゃないか」

こういうのをパラドックスというのでしょうか。全員が二枚ずつなら、二枚が「もっとも少ない」ということになります。全員が三枚なら、四枚なら……？

「ええい、かまうもんか。俺は提出しないぞ」

「僕だって」

ボイコットの言い出しっぺ数人が氣勢をあげました。

「早く授業が終わって、もうけもんだよな」

「帰ろうよ」

まあ、いいか。折檻は、あの人たちに受けてもらいましょう。私は、一枚だけやっておこうかな。それとも、いつも通りの八枚が安全かしら。みんなの顔には、そう書いてあります。

でも、ボイコットを中止しようと口に出して言う子はいませんでした。

ルリは学級委員長です。みんなで決めたことは、率先して守らなければならないと思いました。

——週明けの数学の授業で、プリントを一枚も出さなかったのは、ルリだけでした。劣等生グループまで、三枚とか四枚は提出したのです。

厳しい折檻をされても仲間がいて、それを当てにしていたルリは、パニックしました。でも、この方が良いかもしれません。だって、劣等生グループは男子ばかりです。男子に囲まれての折檻は、厭です。

「驚いたな。選りによって、おまえか。まさか、自分は折檻されないなどと高を括っていたんじゃないだろうな？」

「……………」

ルリは、俯いて黙っていました。反抗的な態度だと思われるのは分かっていたかもしれませんが、それも覚悟の上でした。

「まあ、良い。前へ出ろ」

ルリは足を震わせながら教壇に立ちました。クラスメートに向かい合います。

「服を全部脱げ。下着もだぞ」

クラスがざわつきました。ルリが見聞きした範囲では、学校での折檻は最も厳しいものでも、スカートやズボンを脱ぐところまでです。叩くときには、下穿きをずらしてお尻を剥き出しにすることはありますけれど。

ルリは思わず先生のお顔を見上げました。睨みつけられて、すぐに目を伏せました。

姫子お姉様の修行を思い出しました。ルリも、同じような試練に直面しているのです。

ルリは後ろ向きになって、セーラー服を脱ごうとしました。

パシン！

「きゃっ……？！」

不意打ちにお尻を平手打ちされて、悲鳴を漏らしました。

「こそこそするな。堂々と正面を向いて素っ裸になるんだ」

そんなことをしたら……ルリの何もかもをみんなに見られてしまいます。腰の奥がジンと熱くなってきたので、そのことについては考えないようにして、服を脱いでいきまし

た。ショーツに染みが着く前に脱いでしまおうとして、テキパキし過ぎました。でも、落ち着いてはいました。

「エロいパンツを穿いてるのな」

「委員長て、わりかしボインだよな」

男子のひそひそ声が、しっかり耳に入ってきたのですから。

先生は、私語を咎めようとはなさいませんでした。

靴とソックスを除いて全裸になったルリは、当然ですが両手で前を隠しました。

「今さら、カマトトぶるな。手を下げろ」

反射的に『お立たされ』の姿勢を執ったのは、幼時からの躰の賜物でした。両手を後ろで水平に組んで、バケツひとつ分の幅だけ足を開きました。キヲツケの姿勢で良かったと、すぐに気づきましたが、改めませんでした。キヲツケだと、両手を持て余してしまいます。腕を自分で組むよりは縛られた方が楽だと思うのと同じです。こうして後ろで組んでいれば、前を隠したいという羞恥心を克服できます。

「覚悟は出来ているというわけだな」

先生が教壇を黒板の近くまでずらしました。

「ここに胸をあずけて、両手はいっぱいに広げるんだ」

姫子お姉様の修行と同じ姿勢です。胸に甘酸っぱい感情が広がりました。いざ、その姿勢になると、一段高い所でクラスメートにお尻を向けて脚を開いているという事実、全身が燃え上るような羞ずかしさに塗り潰されましたけれど。

自分で教壇に乳房を押し付けている行為を、クラスメートに股の奥まで晒しているよりも羞ずかしく思っていました。

先生が教鞭を手に執られました。学校での折檻は、基本的にはこれを使います。籐笞よりは短いですが、先端に団栗ほどの膨らみがあって、全体も良く撓ります。折檻をいただいたお友達の話では、籐笞の何倍も痛いそうです。

先生は、ルリの真横にお立ちになりました。ルリが折檻をいただく瞬間が生徒から良く

見えるようにという配慮でしょう。

ひゅっ、バッヂイン！

「きゃああっ……！」

予想を上回る激痛に、ルリは悲鳴をあげてしまいました。籐笥は全体がお尻に食いこんでますが、教鞭は先端の団栗が鉄砲の弾みたいにあたった部分を抉るのです。

控え目ですけれど、はっきりと嘲笑が湧きました。

「なんだよ。月島家のお嬢様だから、もっと根性があると思ってたのにな」

「よっぽど甘やかされてたのでしょうね」

「そういえば、お灸の痕も薄いすわね」

跡取にふさわしい人間になれるよう、ルリは厳しく躰けられています。父様と母様の期待を裏切らない良い子だったから、お灸をいただく機会が少なかつただけです。でも、今の悲鳴は大袈裟すぎました。反省します。

ひゅっ、バッヂイン！

「ごめんなさい！」

二発目はお作法通りに反省の言葉を言えました。

ひゅっ、バッヂイン！

「ごめんなさい。今度から、ちゃんと宿題を提出します」

ひゅっ、バッヂイン！

「ごめんなさい。反省しています」

ふっと、疑問が生じました。何発で赦していただけるのでしょうか。折檻のときは、最初に何発と告げられることが多いのです。どうしても自分の非を認めない子には「反省するまで」という厳しい叩き方もありますけれど。

ひゅっ、バッヂイン！

「ごめんなさい。提出していない宿題も、ちゃんとやります」

折檻をいただくうちに、自分が不利になる言葉も自然と口を衝いて出ます。罰を軽くし

ていただく、手加減していただくという、さもしい根性からではありません。より厳しく自分を律さなければ良い子に戻れないという反省からです。

先生の手が止まりました。

ルリの赤く腫れた（に決まっています）お尻を掌で優しく撫でてくださいます。痛いですが、愛情表現ですから、我慢するのではなく、喜んで受け容れなければなりません。

「そうか。では、鞭は今日のプリント枚数分で勘弁してやる」

二十四発です！ お尻ジャモジでだって、そんなに叩かれたことはないです。

「ありがとうございます」

でも、もしかしたら未提出の四十枚分を叩かれていたかもしれないのですから、本心からの御礼でした。

「ひゃ……」

ぎりぎりのところで、悲鳴を飲み込みました。だって、先生の指がお股の内側に滑り込んで……割れ目の中まで指が^{はい}挿入してきたんです。一瞬のことで、割れ目の内側に隠れている経血が漏れ出てくる穴にまでは達しませんでしたけれど。

先生が元の位置へお戻りになって。

ひゅっ、バツヂイン！

「ごめんなさい！」

ひゅっ、バツヂイン！

「必ず宿題を提出します！」

ひゅっ、バツヂイン！

「二度と宿題を忘れたりしません」

この「二度としません」は、重い意味を持ちます。誓いを破ったときには、どんなに厳しい折檻をいただいても、悪いのはルリなのですから。でも、この誓いは守れると分かり切っていました。だって、本当の意味で宿題を忘れたなんて、これまでただの一度もなかったのですから。

ルリが自分で数えていたわけではありませんが、きつと二十四発でおしまいにしてくださいさったと思います。これも、温情溢れるお計らいでした。

もっと厳しい折檻になると『数え打ち』というのがあります。ひとつ叩かれるたびに、正しく数えるのです。もし間違えると、最初からやり直しになります。わざと途中で手を休めてお説教をして、数え間違いを誘うお母様もいらっしやるとか。もちろん、数え間違えるのは、心の底から反省していないからではあるのですけれど。

二十四発の折檻が終わると、つぎは反省の時間です。ルリは全裸のまま、教室の後ろで『お立たされ』をさせていただきました。ものすごく甘い処分だと——不満なんか、ありませんでしたよ。人が行き来する正門の前で『お立たされ』するよりも、ずっと寛大な処置だと感謝しなければなりません。

六時限目の授業が終わった後は、普通に制服を着て——余韻でパンツがジुकジुकしてくるのを素知らぬ顔で、お友達とおしゃべりをしながら家へ帰りました。折檻ですべての罪が帳消しになったと考えるのが、この島の良い所です。お灸痕の数と場所によっては、お友達が出来なくなったり結婚に差し障るのは——これは『常習犯』なのですから、致し方ありません。

父様からの過酷な折檻

宿題をボイコットした罪が帳消しになったと言いましたけれど、それは学校の中に限ったことでした。

学校での折檻は、必ず父兄に連絡が行きます。

余談ですが、島では今も『保護者』ではなく『父兄』と言っています。男尊女卑がどうこうと世間ではかまびすしいですけど、男は家族を護り、女は家族を増やすという生物学的な規範を小賢しい屁理屈で捻じ曲げるのはいかなものかと思います。島に今も根付いて

いる風潮を、大学で学んだ学問でルリなりに『理論武装』した結論です。

ルリがクラスメートと語らって宿題をボイコットして、挙句にクラスメートから裏切られたことに、父様は二重の意味で烈火のごとく憤怒されました。

そもそも、徒党を組んで先生に反抗することが、学生としてあるまじき所業なのです。しかも、月城家の跡取娘ともあろう者がクラスメートに裏切られるなど、人望の無い証拠だと、父様から極めつけられてしまいました。

もしも、ルリがボイコットに積極的に反対していたら今回の騒動は起こらなかったでしょうし、宿題が三倍になったときに「わたくしは提出しません」と宣言していたら、皆様も雷同なさって——月城家の跡取娘が起こすにふさわしい規模の叛乱になっていたことでしょう。それはそれで、学校と月城家で合同の凄まじい公開折檻になっていたに違いありませんけれど。

ルリがどちらの道も選ばなかったのは、学校でクラスメートの前で先生から、ごく普通の折檻を受けたかったからです。全裸というのは、普通ではありませんでしたけれど。

先ほど、仮定の台詞の中で一人称を『わたくし』としましたけれど、実際には滅多に使いません。『ルリ』と言わずに『わたくし』と言うのは、明確な意思表示のときだけです。普段使いにすると、高飛車な印象を与えてしまいます。一人称に名前を使うのは、可愛い女の子にだけ許された特権です。

父様はルリを土蔵の前に正座させて、なぜ怒っているのかを諄々と諭されました。母様も、横で聞いてらっしゃいました。さいわい、裕二と茉梨は呼ばれていなかったのも、姉の面目は保てました。

お説教が終わると、父様は大きな古めかしい鍵で土蔵の扉をお開けになりました。「土蔵へ入るか自分の部屋へ戻るか、自分で決めなさい」

何よりも厳しいお言葉です。問答無用で折檻なさるのではないのです。自分で決めろとおっしゃっているのです。もちろん、こういうふうになさるのは、学校での温情溢れる折檻では足りないとお考えの証拠です。でも、みずから折檻をお願いするなんて、すごく浅

ましいことだと思ってしまうのは……ルリが、頭ではなく胸と腰で折檻を望んでいるからです。

自分の部屋へ逃げ込んだら……父様にも母様にも愛想尽かしをされることでしょう。だからといって、裕二や茉莉が家督を継ぐことにはなりません。ルリの将来の旦那様に、実権をすべてお譲りになって、ルリは飼い殺しにされるかもしれませんけれど。

そんなことはどうでも良い（こともない）のです。両親に見捨てられるのは、子供として最大の不幸、いえ、地獄です。

ルリは、土蔵の扉の前の上がり框で靴を脱ぎました。それから、大きく深呼吸をして。一步ずつを踏み締めて土蔵へ歩み入りました。

ギイイイイ……ガチャン。

扉が閉まりました。そこにいらっしゃるのは、父様だけでした。母様は外でお待ちになっているのか、屋敷へ戻られたのか——それは分かりませんけれど。

目の前には、幼い頃に一度だけ見た折檻台が横たわっています。巫女さんの修行に使われた折檻台ほどの年季は感じさせませんが、手足を拘束する革ベルトがモダンな(?) 恐ろしさを漂わせています。

先ほど、ルリは父様に試されました。だから、今度は父様をルリが試す。そんな悪戯心というか反発が心の底にあったのは事実です。でも、最も厳しい折檻をいただくのですから、当然のお作法です。

教室と同じように、ルリは父様に正面を向けて、セーラー服を脱ぎました。ブラウスもブラジャーもショーツも。そして、ソックスも脱いだのです。ソックスはは付け足しのようなものですけれど、「一糸纏わぬ」というところに大きな意味があるようにも思えました。

父様はルリの正面から動かず、目を逸らそうとはせず、腕組みをしてルリの一举一動をご覧になっていました。

ルリは、勝手に折檻台へ上がるほど恥知らずではありません。『お立たされ』の姿勢で、父様のご命令を待ちました。

父様が腕組みを解いて、息がおでこに掛かるほどまで迫って来られました。ルリは今でこそ、女子としては背の高い方ですけど、この当時はまだまだ成長途上だったのです。

父様の手がずっと動いて、掌がお股を掬い上げました。

「あ……？」

それだけでなく、指が割れ目を抉って、奥の穴にまで達したのです。

「つ……」

ピキッと引き攣るような小さな痛みを感じましたが、それを言うてはいけないと思いました。なによりも、これから想像を絶するような折檻をいただくのです、これしきのことでは、痛いのに字も言えません。

父様はすぐに指を抜いてくださいました。指先を白熱電灯にかざして、ふうと溜息を吐かれました。

指先がぬらぬらと続っているのが、ルリにも見えました。

「矯正できれば、それに越したことはないが……さもないければ、そういう仕儀に運ぶしかないかな」

独り言です。声が大きく聞こえたのは、土蔵の壁が外界の音を遮断して静まり返っていたからです。独り言の証拠に、ルリには意味不明の呟きを解説してはくさいませんでした。

「あそこの鏡で、自分の尻がどうなっているか、見ておきなさい」

土蔵の隅に、姿見が置いてありました。レースのカバーをはぐって、お尻を映して見て——全体が真っ赤に腫れていて、二十四本（数えたわけではありません）のどす黒い筋が刻まれているのは当然として、その筋の端が小さな楕円形に盛り上がっていました。教鞭の先の団栗の威力を、あらためて肌に感じました。

「その台に、縦に座りなさい」

折檻台の長手方向に向かって（お尻を浮かして）座りました。台の縁から垂れている革ベルトが、ルリの足首と膝に巻かれて金具で絞られました。『お立たされ』のときより、ず

っと脚を開く幅が大きいです。腕は後ろへ垂らして、折檻台とつながっていない革ベルトで手首を十文字に縛られました。

身動きできないように縛られたいという長年の願いが、ついに叶ったのです。

チャリチャリチャリと、鎖に吊られたフックが下りてきます。天井に滑車があるのを見た記憶が、甦ってきました。折檻台に比べれば印象が薄くて、ちっとも怖くなかったのを忘れていたのです。

手首がフックで吊り上げられていきます。自然と膝を伸ばして立ち上がりました。

まだまだ吊り上げられていきます。腕がだんだん水平に近づくと同時に、上体が前へ倒れていきます。胴体と腕が直角になると、それ以上は上がりません。ビキキッと痛みが奔ります。

ふだんは幾らでも腕を振り回せるのに、とても不思議です。不思議がっている場合ではありません。鎖はさらに巻き上げられています。自然と上体は前へ前へと傾きます。

でも、すぐに限界に達しました。上体が四十五度くらいまで傾くと、それ以上は身体を倒しても肩が大きく沈むので手首の位置が上がりなくなりました。身体を起こしても倒しても、いっそう腕を振じ上げられるだけになりました。そこでやっと、父様は鎖から手をお放しになりました。逆転ストッパーが仕込まれているのでしょう、鎖は緩みません。

縛られて身体を固定されるのが、こんなにつらいとは知りませんでした。

父様がズボンの革バンドをお抜きになりました。

ああ、やはり。ルリは、覚悟を決めました。いえ、最初から分かっていたことです。土蔵での折檻は、最高に重い罰です。お道具だって、もっとも厳しい物が使われるのは当然です。

でも、父様はすぐに折檻を始めようとはなさいませんでした。ルリのお尻を優しくしつこく撫でてらっしゃいます。

教鞭で二十四発も叩かれて、真っ赤に腫れあがったお尻です。紙ヤスリで擦られているみたいに痛いのです。

「教鞭で叩かれたすぐ後で、今度はベルトだ。泣き叫ばれては、父様の心が挫けてしまう。だから、声を封じてしまうよ」

「……父様の思うようになさってください」

父様のお考えとは別の意味で、ルリも声をふさいでいただくほうが安心です。学校で二十四回も、悲鳴の代わりに謝罪と反省を大声で叫んで、喉が掠れています。さらに大きな悲鳴をあげたら、喉が破れるかもしれません。

父様は、ルリが脱いできちんと畳んでおいたセーラー服の下から、ショーツを引っ張り出されました。裏返して、肩をお竦めになりました。父様は何もおっしゃいませんでしたが、先ほどの指と合わせて考えると、ルリが濡らしていたことはお分かりになったに決まっています。

お股がジクジクしてくるのが、フシダラな——クラスメートが気軽に『エッチ』と言っているよりもっと淫らなことと関係しているという理解が芽生えていただけに、ものすごく気まずくて羞ずかしかったです。

父様は股^{クロッチ}布が表面になるようにショーツを丸めて、ルリの口元へ突き付けられました。今さら拒めません。観念して頬張りました。気のせいかもしれませんが生臭くて、それなのにちょっぴり甘い味がしました。

父様は土蔵の隅から荒縄の切れ端（探せば、いくらでも落ちています）を拾ってきて、それでルリの口をお縛りになられました。

「うああ……」

言葉は無理ですが、声は少し出せます。もっと嚴重にしなくて良いのかしらと、変な心配をしてしまいました。

パシン！

父様が革バンドを宙で跳ねさせて、乾いた音を鳴らしました。そして、ルリの真後ろへお動きになりました。

首をいっぱい捻じれば、視界の隅にお父様の姿がぎりぎり見えますが、肩が痛いので

長くは続けられません。動きをはっきり見定めるのは——無理でした。

「学校でも折檻されたことだから、十発だけで勘弁してあげよう」

「^{ありがとうございます}
あいあおおあいあう」

ぶゆうん、ズバッチイイン！

「も`お`お`お`お`っ……！！」

灼熱の衝撃が、お尻を切り裂きました。籐笥の何倍も痛いとされている教鞭など、まるきり子供騙しの『お仕置』でしかなかったと痛感させられました。

「ううう、う……」

呻き声が止まりません。たちまち、視界が涙でぼやけます。

ぶゆうん、ズバッチイイン！

「み`や`あ`あ`あ`っ……！！」

涙と鼻水で、息が詰まりそうです。猿轡が不完全だった理由を納得しました。父様の優しさに胸が熱くなりました。お尻は、もつとずっと熱いですけど。

ぶゆうん、ズバッチイイン！

「む`お`お`っ……！」

すこしは、この凄まじい劇痛にも熟れてきました。でも、悲鳴を完全にはこらえられません。

ぶゆうん、ズバッチイイン！

「む`お`お`っ……！」

打たれた瞬間には、どうしても身体が跳ねてしまいます。肩もビキビキと痛みます。

ぶゆうん、ズバッチイイン！

「み`み`や`あ`っ……！」

本当に馬鹿なことをしたと、心の底から反省しています。でも、後悔だけはしていません。

ぶゆうん、ズバッチイイン！

「も`お`お`っ……！」

ぶゆうん、ズバッヂイイン！

「も`お`お`っ……！」

声を塞がれていても、喉がひりつきます。

ぶゆうん、ズバッヂイイン！

「も`お`お`っ……！」

もう、一分一秒でも早く折檻を終わらせていただくことしか、望むことはありません。

ぶゆうん、ズバッヂイイン！

「み`や`あ`っ……！」

ぶゆうんん、ズバッヂャアアン！

ひときわ激しい風切り音に続いて、鋭い刃物のような灼熱がおしり全体で爆発しました。

「あ`や`ま`あ`あ`あ`あ`あ`あ`っっっ……！！」

全身が硬直して、ひと呼吸を置いて力が抜けると同時に……

ふしやああ……

「い`や`あ`あ`！ い`あ`い`え`！」

お漏らしをしてしまいました。

羞ずかし過ぎます。死んでしまいたい。

でも、お父様は素知らぬ顔で、ルリの拘束をほどいてくださいました。

拘束台から転げ落ちてうずくまっているルリの前に、たくさんの檻褌布を積んでくださいました。

「父様も、この台の上で粗相をしたことがあるんだよ」

女の方がちびり易い身体の作りになっているのだから、気にすることはないと慰めてくださいました。

父様のお言葉の半分は嘘だと思います。誰にだって年少の時分はありますけれど、こんなにガッシリしてらっしゃって、今だって祭礼では現役の漁師さんと相撲を取って勝ち越

す（八百長でないくらいは、ルリにも見分けられます）偉丈夫の父様が、まさか折檻でお漏らしをしたなんて、信じられません。女のルリを庇ってくださっているのです。

でも、厳しい父様であることに変わりはありませんでした。

「襦袢布は、ひとまとめにして燃やさない」

粗相の後始末が終わるまでは裸でいなさいとお命じになって、土蔵を出て行かれました。

ルリは、すぐにお小水を襦袢布で拭き取りました。折檻台も床もピカピカに磨きました。

途中で気がついて、自分の身体も拭きました。

十分くらいかけて、すっかり綺麗にして。

ふっと気になって、姿見にお尻を映して見ました。紫色に腫れあがっているだけでなく、何か所か肌が裂けて血が滲んでいました。一か所だけ深く裂けていたのは、最後の一発でしょう。もしも、あれが十発だったとしたら、ルリのお尻はもっと酷いことになっていました。お父様はじゅうぶんに手加減してくださったのです。

土蔵からすこし離れて母屋からも十分に距離を空けて、湿った襦袢布を積み上げて、マッチもライターも無いことに思い至りました。

勝手口へ行って、お母様にお借りするのは、ほんのすこしだけ羞ずかしかったです。もちろん、門の前で『お立たされ』することを思えば、数のうちに入りませんけれど。

ルリのお尻が、あまりにズタボロだったので、お灸の折檻と反省の『お立たされ』は免除していただきました。

自慰封じには淫核お灸

おいたをしながら、いつの間にか寝落ちしてしまいました。でも、指がちょっと動いて、お灸痕をもちに刺激して……痛みで目が覚めました。

実核のお灸痕は、直に刺激すると、今でも悶絶しそうな激痛ですけど、周辺を繊細に

弄ってあげると悶絶しそうな快感なのです。

ルリをこんな特異体質にしたのは母様ですが、根本はルリが悪いのです。それに……激痛と快感を同時に味わえるなんて、素敵な体質だと思います。

初潮を迎えてからは、当然ですがその部分への興味と好奇心が募っていきました。学校の図書館では漠然とした（最も重要な『行為』と『経過』については慎重に削除された）知識しか得られませんでした。いきおい、自分で探求を試みます。

クリトリスの存在と、そこへの刺激が他の何物にも代えられない快感を生み出すことも、じきに知ってしまいました。

幼い頃から感じていた、胸のキュウウンと腰の奥のジンジンとが、そしてお股のジュークジュークとが、クリトリスの一点を ^{かなめ}要として、ひとつにまとまりました。性的興奮と、そこからもたらされる性感に。

ですが、経血が漏れ出る穴との関係は、漠然とは予感しながらも、まだ十分には理解していませんでした。真の意味で理解したのは、わずか半年前ですが——そのお話は、ひとまずは置いておきます。

クリトリスへのおいたが凄まじく気持ち良いと知って、しかも本能的に後ろめたさがつきまとっていたので、ますます——ルリはのめり込んでしまったのです。でも、独りきりになっておいたに耽るには、環境が不自由過ぎました。

家は広くて、姉弟妹それぞれ二階に子供部屋をあてがわれていましたけれど、基本的には和室です。襖一枚で隣とつながっています。学校では、ルリは月城家のお嬢様として、常に多くの人たちから注目を浴びています。

それでも、こっそりと……続けられる訳がありませんわね。

「姉様、お身体の具合が悪いの？」

いきなり襖を開けられても取り繕えるように頭から布団をかぶって、お風呂上りに穿き替えた古いショーツを口に押し込んで（これは、土蔵で父様にいただいた折檻の記憶が強

烈だったせいです)、もうすこしで身体全体がビクビクッてなる寸前に声をかけられて、ルリは急転直下です。

もう、みんな寝静まったと安心していたのに。明日は土曜日で、今年からは学校も休日です。だから裕二も茉梨も(母様に叱られないよう静かに)夜更かしをしているかもしれないというのを忘れていました。

「姉様……？」

身体を揺すぶられたので、ますますうろたえました。ショーツを口から引っ張り出すのが、やっとでした。

茉梨は(心配のあまりというのは分かっています)断わりも無く掛布団をはぐりました。

乱れたパジャマを整えようとして、かえってルリは、膝までずらしているズボンを見せつける失態を犯してしまいました。

「あ、あのね……違うの。これは……」

これはオナニーといって、気持ちが良くなるオマジナイなのよ——なんて、言えるはずもないです。後から考えれば、正直に。

「友達から教わった遊びを試していたの。でも、エッチなことだから、母様には内緒にしておいてね」とでも、お願いすれば良かったのです。

十中八九は、姉の必死の願いを無碍にする茉梨ではなかったでしょう。

ところが、咄嗟に頭に浮かんだ言葉は『共犯』でした。茉梨にも、この気持ち良さを教え込んでしまえば、二人して秘密を守り抜こうとするに決まっています。

「おとなしくしていてね。良いことを教えてあげるから」

茉梨の手を引いて布団の上に転がしました。

「姉様……？」

「しっ。おとなしくしていてね。怖いことはないから」

左手で茉梨の肩を押さえておいて、右手をショーツの下へ滑らせました。

ほんとうに、ツルツルぷっくりした手触りでした。ルリは毛を抜いていますから、どう

しても抜いた跡がザラついています。

ルリより小さくてシンプルな縦筋の端に隠れているクリトリスをほじくり起こすのは、思っていたよりも手間取りました。

茉梨は、姉を信頼しておとなしくしていました。

でも……ルリより小粒なクリトリスを指でつまんで包皮をニョルンとしごき下げた瞬間。

「ひゃああっ?!」

広い屋敷じゅうに響き渡るほどの悲鳴をあげたのです。

あわてて口をふさぎました。

「声を出さないで。気持ち良いでしょ?」

コクコクと茉梨が頷きました。

ルリは安堵すると同時に、理由を忘れて手段を考えてしまいました。

というのは。声を出すなという言いつけを守るのは無理だろうし、掌で口をふさぎっ放しでは窒息させてしまうかもしれないから——ショーツを口に詰めれば良いと短絡的に考えたのです。ルリは、それで興奮したのですから、茉梨も同じかもしれません。

ルリが忘れていたのは、なぜ声を封じるかという理由の方です。

茉梨のズボンを脱がそうとしているところへ——廊下側の襖が開いたのです。

「瑠璃さん。何をなさっているのですか!」

母様の声が、雷鳴となってルリを直撃しました。

言い逃れできる状況ではありませんでした。それも、オナニーをしている現場を見られたのではなく、妹に性的な悪戯を仕掛けている現場を摘発されたのです。

もう、なるようになれ——と、覚悟を決めて、ズボンを膝までずり下げた無様な格好のまま、畳の上に正座しました。

「お股へのおいたがすごく気持ち良いということを、茉梨にも教えてあげようとしていました」

オナニーという単語は、羞ずかしくて口にできませんでした。

明かりが豆電球だけだったせいでしょうけれど、母様の表情がまったく伺えませんでした。

「分かりました。居間へお出でなさい」

折檻をいただくのは当然ですけど、どれほど厳しいのでしょうか。まさか、宿題を集団ボイコットしたとき（先生から教鞭を二十四発と、父様から革ベルトを十発）ほど苛酷ではありませんように……。

「どうせ脱ぐのです。無駄なことはせずに、ここで脱いでしまいなさい」

ズボンを引き上げようとして、叱られました。母様の言い付け通りに、ズボンとショーツを脱いで、きちんと畳んで枕元に置いてから、居間へ行きました。

居間には家族全員が集まりました。折檻をいただくときは、普通はルリひとりです。弟妹が同席させられるのは、ひときわ重い罪——最近では超ミニスカート事件のときくらいのものでした。あれだって、半分は成り行きみたいなものです。

夜半になってから、眠っていた裕二を起こしてまで、どころか父様まで巻き込んでなどというのは、これが初めてです。

居間の真ん中は昔ながらの掘り炬燵になっていて（熱源は床下の電気ヒーターです）、その上に細長い和室用ダイニングテーブルが置いてあります。

母様の言い付けで、テーブルの上を片付け、テーブルクロスを折檻用の耐熱シートに敷き替えました。つまり、お尻叩きの有無は分かりませんが、お灸は確定です。

「瑠璃さんのしたことは、お灸の九つ分にも相当します。身体を動かさずにいる自信が無いのなら、縛ってあげます」

また、自分で選ばなければなりません。本当に反省しているなら、どれだけ苦しくても見苦しく藻掻いたりしないで耐え抜くのが、正しい折檻の頂き方です。

「ルリは、頑張ります」

「それでは、そこで俯せになりなさい」

ルリは恐怖に震えながら、ダイニングテーブルに寝そべりました。恐怖と言いましたが、恥の方が強いです。九つのお灸。たった一回で消えない痕が残るとは限りませんが、艾の大きさによっては、考えられないこともあります。お尻に九つもお灸痕のある娘を誰がお嫁に……ではなく、婿入りしてくださるでしょうか。

母様がお灸のセットを、ルリの脇腹にくっつけてテーブルの上に起きました。ますます、身を藻掻くことが出来なくなりました。

ルリはテーブルに顎を乗せて正面を見詰めました。自然と、両手はテーブルの脚を握り締めます。

お尻に艾が据えられました。ちょこんと乗せるのではなく、しっかりと肌に貼り付くように据えるのです。

シュボッとライターの音。お線香に火が点じられるのが、気配で分かります。でも、まだ艾は二つきり。クラスメイトからは薄いと言われましたが、それでもくつきりと黒く窪んでいるお灸痕に据えられているきりです。

艾の焦げる匂いが漂ってきました。ちょっと温かいなと感じると、すぐに、じわじわと熱くなってきます。チリチリと肌を切り裂くような鋭い熱さになります。鍼灸治療で使う艾は米粒くらいの大きさで、この鋭い熱さがピークで、これを『皮切り』というのだそうです。

でも、折檻のための艾は小豆よりも大きいのです。チリチリでは終わらず、ヂヂヂと灼熱が肌を突き抜けてきます。

くううう……いつもより、熱いです。小豆どころか、姫子お姉様が修行で据えられたアボロチョコくらいの大きさかもしれません。全身に脂汗が滲みます。

歯を食い縛り、テーブルの脚を握り締めて……お尻の奥まで沁みる灼熱をこらえます。

艾が燃え尽きると、母様がフウウッと灰を吹き散らしてくださいました。冷たくて、ちょっと気持ち良いです。

え……？

同じ場所に、また艾が据えられました。こんなのは初めてです。

「母様……？」

「お灸九つ分にも匹敵すると言い聞かせましたね」

そんなにたくさんのお灸痕がある娘など、月城家の不名誉です。同じ場所に続けてお灸をしてあげますと、母様はおっしゃいました。

「……ありがとうございます」

それはルリの本心でした。ルリ自身の名誉のためにも、月城家の面目のためにも、そうしていただくしか方法が無いとは、落ち着いて考えれば分かることです。

すぐに二回目（左右同時ですから三つ目と四つ目です）の艾にも火が点きました。

「きひいいい……」

じわじわもチリチリありません。いきなり、ゴウゴウと燃え盛るような、グラグラと煮え滾るような灼熱です。何十回とお灸を据えられて黒く硬くなっている皮膚が、あらためて焼き切られているのが、分かります。

「ごめんなさい。二度とおいたはしません！」

思わず叫んでいました。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！ ごめんなさい！」

艾が燃え尽きるまで、ルリは絶叫を続けました。

母様が灰を吹き飛ばしてくださったとき、ふうっと気が遠くなりかけたほど安堵しました。でも、まだ三回は繰り返さなければならないのです。

チクッと、お灸とは異質な痛みを感じました。痛みは一瞬ではなく、ヂクヂクと突き刺さってきます。

「その針も折檻のうちのなか？」

父様のお言葉で、異質な痛みの正体は分かりました。でも、なぜ……？

「二度のお灸で肌が焼け爛れています。これ以上は、痕が大きくなり過ぎます」

繰り返しますが、母様は本土出身の方です。お灸折檻をいただいたことはありません。

でも、いろんな方から教わって、島で二代目三代目の人よりも知識はお持ちです。

「針を何本も刺して、その上からお灸をすれば、熱が深く沁み込む代わりに表面への影響は小さくなります」

そうかもしれませんが。針で指を突いたくらいはあるでしょう。大した痛みではないとお思いなのではないでしょうか。それとも、お尻の皮は厚いから痛くない……

「痛いっ……！」

「我慢なさい。火傷の上に針を刺すのですから、痛いのは分かります。でも、ルリさんのお尻を美しく保つのに必要なのですよ」

美醜は女の一大事です。耐えます。

左右に五本ずつ突き刺されました。そんなに深くは刺さった感じがしませんでした。せいぜい一センチか二センチだと思います。爪の間に刺したら、一センチでも大ごとですけど。

今度は艾の形を整えてから据えるのではなく、ばらばらのまま針束のまわりに盛り付けるような感じでした。でも、艾のねっとりした感触は、ちゃんと肌に感じます。

「あら……？」

艾に火を点けても、すぐに消えるみたいです。ルリは、まったく熱さを感じません。

カチッ……ライターで直に着火させたようです。

「ぐうぐうぐう……！」

右のお尻だけが、二回目より、もっと熱いです。

カチッ……十秒ほどしてから、左のお尻も同じように灼け始めました。

「あゝあゝあゝ……ごめんなさい！」

悲鳴を封じ込めるためにも、反省の言葉を叫び続けます。

「ごめんなさい！ 熱い！ ごめんなさい！」

「姉様、頑張って！」

茉梨が励ましてくれます。そうです。弟と妹が見ているのです。二人は、こんなに凄ま

じい折檻をいただくことは無いと信じますけれど、それでも、あまりに苦しむ姿を見せつ
けると、折檻を怖がるように——普通の子よりもずっと、病的なまでに怖がるようになる
かもしれません。

姉としてのプライドもあります。涙がこぼれるのは、どうにも出来ません。でも、泣く
のをこらえるのは……できなくても、こらえます。

「はあ、はあ、はあ……」

三回目が終わったときには、肩で息をしていました。全身が脂汗でぐっしょりです。

それでも、すぐに四回目のお灸です。

四回目は、あまりつらくなかったです。意識が朦朧として、熱いのか痛いのかも、良く
分かりませんでした。お尻の神経が麻痺したのかもしれません。

四回目のお灸が終わると、母様は針を抜いて、アルコールを染ませたガーゼでお灸痕の
まわりまで拭ってくださいました。沁みて痛かったけれど、気持ち良くも感じました。

これで終わりでしょうか。

9 ÷ 2 = 4 おまけ 1……ではありませんでした。

母様はルリに仰向けをお命じになりました。でも、火傷がテーブルに触れないように、
二つ折りにした座布団を腰にあてがってくださいました。

そんな気遣いに感謝するどころではありません。まさか、最後のひとつをお股に据える
おつもりでしょうか。そんなのって、女の子にとっては、お尻に九つの火傷痕があるより
も不名誉です。

女の子と限定したのは、

「ワシのチンポにや、お灸の痕があるんだぜ。残念ながら、キトウじゃねえがよ」

そんなふうになんかの男の人が自慢しているのを、一度だけ耳にしたことがあるからです。お酒
の席で昔のワルガキぶりを自慢するような口振りでした。

「母様……お股だけは赦してください」

それくらいなら、あと十回だって、お尻にお灸をいただきます。火傷したばかりのとこ

ろを革バンドで叩いてくださっても……姫子お姉様みたいに、お股を鞭打たれたって構いません。

「安心なさい。ルリさんがお嬢さんを迎えられなくなるようなことはしません」

ほっとしましたが……それなら、何をなさるおつもりなのでしょうか。

「瑠璃さんが、二度とフシダラなことをしないように、ここを封じてあげます」

母様はルリのクリトリスをほじり起こし、皮を剥き下げて絆創膏で下腹部へ貼り付けなさいました。

「そこは……赦してください」

ちょっと触れただけで稲妻のような電気が奔る部分です。お尻みたいに皮膚は分厚くありません。いえ、皮膚ではなく粘膜です。そこを灼かれるなんて……考えるよりも先に気絶しそうになります。

「駄目です」

ピシャリ。冷酷というわけではありません。そうすることがルリの為になると、心底思っ
てらっしゃると分かる、強固な声でした。

「ここなら、瑠璃さんの旦那様になる方以外の目には絶対に触れませんからね」

母様は、ちゃんとルリのことを考えてくださっているのです。

ルリも、覚悟を固めるしかありません。でも。狂乱して、艾を払い落とそうとするのではないのでしょうか。

ルリは両手を胸の前で交差させて——パジャマの上から乳房をつかみました。もう、はつきりとつかめるくらいまで、乳房は膨らんでいます。

母様はルリの目の前で、艾を固めてくださいました。米粒を横半分に割ったような、鍼灸の治療としても小さな艾です。

これなら、きっと耐えられる。そんなに酷いお灸痕にもならない。そう思う反面、お尻はアボロチョコの百倍も大きいけれど、実核は米粒の十倍くらいではないのでしょうか。

ああ……とうとう、実核の上に艾が据えられました。座布団で腰を突き上げられている

ので、見たくないくらいに、はっきり見えます。剥き出しの実核の上に、立入禁止などに使う三角コーンが突っ立っている印象です。

母様が線香をお近づけになります。

ルリは、ぎゅっと目をつむりました。

「ひいっ……！」

いきなり灼熱が突き刺さりました。

「うああああああっ……熱い！ ごめんなさい！」

絶叫しました。

乳房をわしづかみにして、指が折れるほどの力を入れました。乳房の痛みで、すこしだけクリトリスの灼熱と劇痛から気が逸れました。

ぐっと、腰を押さえ付けられました。この大きな手は、父様です。ルリが腰を跳ねて艾を払い落とさないように、支えてくださっているのです。艾を落としたら、大きくしてやり直すというのが、お灸折檻のお作法なのですから——そうならないように、してくださったのです。

不意に気力が緩んで、ルリは大声で泣いてしまいました。

「熱いよおおお！ ごめんなさい！ うわああああああんんんん……！」

いよいよ艾が燃え尽きる寸前、火が粘膜を直に焼く瞬間。またも、ルリは粗相をしてしまいました。もしかしたら、父様にまで飛ばしてしまったかもしれません。それでも、最後まで父様は揺るぎなくルリを押さえ続けてくださいました。

「はああああ……」

燃え滓を吹き飛ばしてくださる母様の息が涼やかでくすぐったくて、快感ではないけれど、それにちかい感覚が生じて、もしかするとルリの溜息は幸せそうに聞こえたかもしれません。

お漏らしの後始末を父様がしてくださいます。ありがたくて申し訳なくて、ルリはとて目を開けられません。乳房に食いこむ指の力を緩めるのが、やっとでした。

「え……？」

ずきずき悲鳴をあげている実核に、ねっとりした感触が押し付けられて、ルリは疑問と恐怖の声を漏らしました。

「お仕置は、まだ終わっていませんよ」

嘘！ だって、 $8 + 1 = 9$ です！

「こんな小さな艾では、とても一回分のお灸にはなりません」

一回分の大きな艾を作って、そこから小分けにするべきですが、それでは瑠璃さんが可哀想だから、あと二回だけで赦してあげます。お母様は、そうおっしゃいました。

アボロチョコから米粒半分が何十個作れるか……

「ありがとうございます、母様」

ルリは戦慄しながら、あと二回のお灸折檻に絶望しながら、それでも心の底から、母様に感謝しました。

二度とフシダラなことをしないようにクリトリスを封じるとおっしゃった母様の目論見は、数年間はその通りになりました。包皮の上からチョンツと触れるだけで、絶叫するほどの激痛が奔るようになったのです。そこがどうなっているかを、皮を剥いて確かめる勇気が湧くまでも、半年は掛かりました。母様は火傷が落ち着くまで、何度か皮を剥いて手当をしてくださいましたが、ルリの恐怖は「怖いもの見たさ」を突き抜けていました。

後輩と濃密な百合遊戯

最終学年の一学期に、ルリは一年後輩から突然の告白をされました。

「あたし、この一年間ずっと、お姉様に恋していたんです」

そうなんです。告白してくれた子は、^{つるがあい}敦賀愛というれっきとした女の子です。ルリも女

の子です。思春期の女の子が一度は通る百合の道——というのは、訂正します。ルリは一直線に、北の月城家を切り盛りしてくださるお嬢さんへの道を歩んでいたつもりだったのです。その瞬間までは。

「お姉様の立場は、分かっているつもりです。でも、学生時代の思い出くらいには記憶に留めてください。一度でいいですから、抱き締めてキスしてください」

うわあ、積極的。ルリには思いつくことすら出来ない、恋愛一直線の台詞です。

言葉の勢いに押し流されました。それに、少女向けコミックでもラノベでも、百合は王道です。自分が物語のヒロインになった気分でした。

ルリは黙って愛ちゃんの手を取って引き寄せて、背中に手をまわして強く抱き締めました。アイちゃんの顔は自然と上向きになって、目を閉じて唇を薄く開けています。ルリは唇を重ねて、これ以上はやり過ぎかなと思いつつも、アイちゃんの開いた唇に舌を挿し入れました。

ルリが本屋さんでいかがわしい雑誌なんかを買うと即刻ご注進ですが、お友達の持っているコミック誌を借りて読むのまでは母様の目も届きません。ディープキスの『知識』くらいは、あったのです。

雑誌では分からない、生々しい感触に、ルリも愛ちゃんも興奮しちゃいました。胸キュウン腰ジンジンお股ジュクジュクです。

こうして、秘密の実践派カップルが成立したのです。

他愛ないものでしたよ。ルリは特定のクラブ活動はしていませんでしたので、わりと自由に、お友達数人を誘って——休日に公園でお昼を食べたり、島で唯一の映画館へ行ったり。下級生と普通に仲良くしているお友達に、その下級生も誘わせて、下級生も何人かのクラスメートを誘うように仕向けて、偶然に、いつも、愛ちゃんも混ざっている。我ながら策士ですわね。映画館では三年生と二年生とが入れ子に座るようにして。でも、薄暗いのを悪用したりはしませんでした。

そういうのは、教室移動のわずかな時間を盗むとか、何となく独りで海岸を散歩してい

て、偶然に一緒になって、さりげなく岩陰へ寄って……今にして思えば、よくも見つからなかったなと思います。偶然に出会っても、三十分とは一緒にいなかったからでしょう。

逢瀬が短いと、かえって盛り上がるものだと、ルリも愛ちゃんも初めて知りました。

お家^{うち}でどんな折檻をいただいているかも、二人が共有するにふさわしい秘密でした。秘密というか、私はこんなに厳しく躡^うけていただいていますという、自慢の側面もありました。

愛ちゃんの家では、お母様からよりも、歳の離れたお兄様から折檻をいただくことが多いそうです。

「お尻叩きはしょっちゅうだけど、お灸はあんまりされないんです。でも……」

裏庭で（当然全裸で）『お立たされ』をして、それから折檻をいただくことがあるそうです。

「あたしの敏感なところを、クリップで挟むんです」

独自の折檻を施す家庭は少ないですが、珍しいというほどでもありません。

画鋸を敷き詰めたマットの上での腕立て伏せとか、ブリッジをさせられてお尻ではなく下腹部を叩かれるとか。『お立たされ』で手を後ろで水平に組むのではなく、水を入れたバケツを両手で持たされているのは、ルリも何度か見たことがあります。コンクリブロックのフェンスの前で開脚逆立ちというのは、お友達からの伝聞です。男の子だったので、近隣の人からの追加のお仕置（オチンチンへのデコピン）が、とてもやり易そうだったということです。

でも、先に『お立たされ』をさせられてクリップというのは、初耳でした。

これまでで一番つらかったのは、いつもは小さなダブルクリップなのに、そのときはワニグチクリップで三つの小さな突起を挟まれて、その上から周辺を特大の目玉クリップで挟まれたときだそうです。凄く痛いし、乳房は変な形に絞り出されて、割れ目はアヒルのクチバシみたいになってしまうので、とても羞ずかしかった——と、愛ちゃんは、ルリの胸に顔を埋めずめて告白しました。

そのときのルリは、ふんわりしたサマーワンピースだったので、敢えてブラジャーを着けていませんでした。ですので、告白を聞くだけでなく愛ちゃんの柔かな頬っぺのせいもあって、ディープキス以上に胸キュウウンでした。

愛ちゃんは女の子の急所を三点とも折檻していただいて、半日も『お立たされ』が続きました。

「そのときは、何も悪いことをした覚えが無かったんです。それを言ったら『分かるまで立っていろ』って、教えてくれなくて……」

最後は『お立たされ』の姿勢を続けていられなくなって、痛いのと悔しいのとで、うずくまってシクシク泣いて。

お母様が「やり過ぎです」とお兄様を叱ってくださったそうです。成人した息子を母親が叱るのですから、よほどに酷かったのだと思います。

「今でも、ワニグチクリップにかまれた跡が残っているんですよ」

愛ちゃんは、スカートをたくし上げショーツをずり下げて、そこを見せてくれました。

「うわ……」

愛ちゃんのクリトリスは、実核が剥き出しになっていました。

ワニグチクリップが咬んだのは、包皮の上からではなかったのです。核の一番膨らんでいるあたりでした。ギザギザが盛り上がり、包皮を堰き止めていました。

「ふとした拍子にショーツの生地とこすれ合って……カクンと腰が砕けちゃったりするんです」

愛ちゃんが耳元で、ねっとりした声で囁きました。

なあんだ。つまりは、気持ち良いってことですね。

「……羨ましいわ」

「えーっ?! ひどい。体育の五十メートル全力走なんて、去年は八秒七だったのに、こんなになってからは九秒五まで落ちたんですよ」

ルリが羨ましいと言った意味を納得してもらうには、論より証拠です。見せてもらった

お返しの意味もあります。

近くに人がいないか、立ち上がって見回して。そのまま、ショーツを下げました。スカートは前の裾を飾りベルトにたくし込んで——お灸痕には触れないよう細心の注意を払いながら、父様が煙草を摘まむみたいにして、そおっと剥きました。

「ひゃ……?!」

愛ちゃんが息を吞みました。

ルリも初めてそこを見下ろして……あらためて、悲しみに浸りました。根元に、濃い茶色の丸い窪みが刻まれています。先っぽの方にサインペンで黒い点を二つ横に並べると、ヘタクソな『おむすび頭』の顔になりそうです。

「お姉様、おかawaiiそう……」

アイちゃんはクリトリスに顔を近づけると、ぱくんと咥えました。

「あ痛うつ……!」

ビクンッと全身が震えました。

「あ……ごめんなさい」

ルリはショーツを元に戻すどころではなく、その場にうずくまりました。

不思議なことに気づきました。激痛は余韻を引いているのですが、その奥からじんわりと、以前のおいたとは異なる、痛いのと気持ち良いのとはがひとつに溶け合ったような疼きが、滲み出てくるのです。

ルリはもう一度立ち上がって、あたりを見回しました。海岸の岩場です。その向こうの海には、遠くに漁船が何杯か見えていますが、乗っている人の姿までは見分けられません。

そして後ろは十メートルも行くと道路のガードレールですが、その下が大きく抉れている部分があります。あそこだったら、真上から覗き込んだって奥までは見えないでしょう。灯台下暗しです。

「愛ちゃん、来て」

抉れたシェルターへ引っ張り込みました。

スカートの裾全周を、飾りベルトにたくし込みました。

「お願い、もう一度……クリトリスを食べてくれる？」

キスではなく咥えて欲しかったので、そう言ったのですけれど。もうちょっと百合っぽい表現もあったのになあと、今ではそれが残念です。

「でも……痛いんですよね？」

「うん。痛い。でも、気持ち良いの。愛ちゃんだって、そういうときがあるでしょ。折檻をいただいて、涙と悲鳴が止まらないのに、それでも気持ち良いのが混じってくる。あれと同じなの」

実は、まるきりそんな感覚にならない子の方が多いというのは、ルリがSMの世界でいう悦虐に目覚めてから、いろんな子に探りを入れたり鎌をかけたりするうちに知りました。考えるまでもなく、当たり前ですよ。

そういう意味でも、愛ちゃんと百合の関係になったのは幸運でした。それとも、似た者同士だから強烈に引き合ったのかもしれませんが。

愛ちゃんは、良くて半信半疑（たぶん一信九疑）ながら、ルリのお願いを聞いてくれました。

「つ……」

また悲鳴をあげそうになって、両手で口をふさぎました。痛いにしても気持ち良いにしても、とても立ってられません。膝を突いて、それから意識してゆっくりと、仰向けに倒れました。咥えてもらいやすいように、脚を開いて腰を突き出す形で。

愛ちゃんもガールズラブコミックの愛読者でした。文字で読み絵で見た知識を駆使して、クリトリスを（おっかなびっくり）舌で愛撫してくれました。

ルリは痛いのと気持ち良いののがグルグルと渦を巻いて、何が何だか分からなくなりかけました。でも、先輩としての面子で踏みとどまって、愛ちゃんにもお返しをしてあげました。

いったん身を離して、愛ちゃんを横倒しにして69の形になって、ワニグチクリップの

痕が刻み付けられているクリトリスを舐めてあげました。

「ひゃうんっつっ……いい、いいよおお！」

愛ちゃんは混じりっ気なしの快感です。羨ましいとは思わなくなりました。酸いも甘いも噛み分けてこそ、快感も深くなります。以前の純粋な快感と比べてみて、それが分かったのです。ルリは悦虐の門の前に立っていたのです。

ルリと愛ちゃんは、身体を丸めて互いに相手のお尻を抱え込むようにして、クリトリスへのディープキスを……十五分とは続かなかったと思います。

「んむう、うううう……！」

「いい、いいいい……！」

これまでにない高みまで、お互いを引っ張り上げて、爆ぜてしまいました。

さすがに、すこしだけ我に還って。砂まみれのまま服装だけは申し訳程度に取り繕って。お友達二人で仲良くお昼寝をしてたって、そんなに変に思われないかなと、自分勝手に都合よく考えて。緩く抱き合ったまま、もうひと休みしました。

ひと休みがどんどん延びて、陽が傾いてしまいました。

ルリは叱られませんでした、愛ちゃんはその日もお兄様から折檻されたそうです。

有刺鉄線管と肛門お灸

期末試験も終わって、夏休みまでカウントダウンのある日。その日も、海岸を散歩していて偶然に愛ちゃん行き会って、ガードレール下のシェルターで、短いけれど濃厚なひと時を過ごしました。

自然な窪みではなく、シェルターです。二人で運べるぎりぎりの（それでも小さな）岩を手前に雑然と積み上げて、五メートルくらいまで近寄らないと、そこに窪みがあること

さえ分からないように偽装していたのです。

お互いのクリトリスをいたわり合って、爆ぜて、気怠い幸せにみちてしばらく抱き合っていた時、愛ちゃんが小さな声で爆弾発言をしました。

「お兄ちゃんの折檻で、絶対にお仕置と違う」

本土の人には、折檻とお仕置の違いが分かりにくいかもしれませんね。悪いことをした子に罰を与えるのがお仕置です。お小遣いをあげませんとか、晩ご飯抜きとか、一か月間テレビゲーム禁止とかも、お仕置です。いろんな罰のうち、叩いたり裸で外に立たせたりするのを折檻というのです。

だから、折檻がお仕置でないという愛ちゃんの主張は矛盾しているように、ルリには思えました。

「だって、お兄ちゃん……あたしを折檻するとき、ズボンに TENT を張ってるんだもの」

男の人がエッチなことを考えると、オチンチンが膨張して硬くなるってことも、レディースコミックで覚えました。でも、ズボンに TENT を張るだなんて、コミックの誇張表現だと思っていました。

「それに、鼻息が荒いし、目がぎらついてるし……必要もないのに、あそこに指を挿れてくるんです。痛いって言っても、折檻だから当然だと言って……」

父様からいただいた折檻を思い出しました。でも、あれは……ルリのお股の中が濡れているのを調べる目的だったと思います。なぜ、それを調べるのかは……あつ、あれもフシダラと関係あるのではないかと、不意に理解が生じました。でも、今はそれを考えている場合ではないでしょう。愛ちゃんがお兄様に抱いている誤解を解いてあげなければ。

でも……愛ちゃんが訴えるお兄様の行為が、どうしても、父様のなさったことと重なってしまいます。

「あたし、家出しちゃおうかな？」

ルリが言葉を探してあたふたしていると、またも愛ちゃんの爆弾発言です。

「家出……？」

「うん。ひと晩かふた晩くらい外泊して、家族をうんと心配させてやるんだ。帰ったら、また折檻されると思うけど……お兄ちゃんも反省してくれるんじゃないかな」

馬鹿な真似はやめなさいと諭すのが、先輩としての務めだと思います。でも……帰ったら折檻されるという言葉に、心が動いてしまいました。

それに。愛ちゃんに同情して一緒に家出をしたという大義名分(?)も立ちます。

ルリはこれまで、両親の言い付けに逆らわないし、学校でも真面目な模範生徒でした。宿題ボイコットでも、必ずしも評判が落ちたわけではありません。

クラスメートからは「ほんと、お馬鹿さんよね」とからかわれながらも、最後まで抵抗した硬骨の女史として特に女子から尊敬されています。というのは、手前味噌ですけど。男子からは、巴御前かジャンヌダルクみたいに見られています。『全裸の〜』という枕詞が付いていますけれど。「何をしでかすか分からない」という意味で、先生方からも一目置かれるようになりました。

そういったイメージを打ち破る、「普通の女の子に戻る」チャンスかもしれません。それは、まあ……普通の女の子は家出なんかしませんけれど。宿題の量が多すぎることに抗議して決起する『闘士』ではなく、ありふれた『不良』ですよ。

当時のルリには、『不良少女』というのも、格好良く見えていたのです。

いつの間にか、どんなふうに家出をしようか——そんな相談を始めていました。

月中市の人口は五千です。都会より、ご近所付き合いはずっと濃密です。隣近所の向こう側の家の知り合いの三軒先のそのお隣さんみたいに手繰っていくと、市内を突き抜けてしまいます。

まさか、山籠もりはしたくないです。家出をするなら、行先は本土しかありません。

朝九時発のフェリーで鹿児島へ渡って、マンガ喫茶で夜を明かして、翌日はあちこち観光して、深夜映画館でふた晩目を過ごして。そういうのを飽きるまで繰り返してから、夜行フェリーで帰ろう。ふたり一緒に行動していれば、ナンパに引っ掛かってホテルに連れ込まれたりはないよね。ちょっとした冒険、軽い気分の家出でした。

善は急げ、不良も先延ばしにするな。土曜日の朝に決行しました。もしも家出が三日坊主に終わるなら、学校の無断欠席は月曜の一日だけで済むからです。

家出に定番の書置きも、ちゃんと残しました。

「お兄ちゃんの折檻はエッチです。反省してくれるまで、家には戻りません」これが愛ちゃんの手紙です。

「九つ分のお灸はひど過ぎました。お灸の痕が痛まなくなるまで、家には戻りません」出し遅れの証文もいいところですし、あと半年過ぎても完全には治らないでしょうけれど、ルリの口実も、結局は折檻の厳しさになりました。以前のように気軽においたが出来なくなったのは、やはり痛恨の極みですから。

ルリたちの最大の誤算は、フェリーの乗組員の人たちが、この航路にだけ従事しているという点でした。定期便のトラックの運転手さんよりも、ずっと島の身内に近い感じです。それだけ、あれこれと詮索されます。

そして、片道切符しか買わなかったのも失敗でした。二日間有効の往復切符は二割引きだから、土曜日の朝に島を出て日曜日の夜には帰って来る——帰りの切符は無駄になります。が、ふつうのお出かけに見せかけるには、こちらを買うべきでした。金曜日にはお年玉貯金を卸していたので、それくらいの無駄遣いは余裕なのに。そこまで頭が回りませんでした。

お昼の便ですから、大部屋の二等船室にしました。無断欠席の日数だけでなく——人混みに紛れ込もうという意図もあって、普段よりも乗客が多い土曜日に決行したのですが、それでも大部屋はがら空きです。退屈なので、部屋にこもるよりも展望デッキで時間を潰します。見渡す限り海と太平洋と海原ですけど、たまにカモメとかが遊びに来てくれます。どこかの公園みたいに「鳥に餌をやらないでください」なんて野暮な看板はありません。パンの耳の詰め合わせなんかを売店で売っています。

出港して五時間。ルリたちもカモメもお昼ご飯をすませて、のんびりとデッキで風に吹かれていたときです。びしっと制服を着こなしたお姉さんが、ルリたちに話しかけてきま

した。

「月城瑠璃さんと敦賀愛さんですね？」

船の切符を買うときは、名前や連絡先を申込書に記入します。ですから、お姉さんがルリたちの名前を知っていても、それほど不思議ではありません。女の子の二人連れは、それなりに目立ちますし。

「船長が、お尋ねしたいことがあるそうです。一緒に来ていただけますか？」

あちゃあ、ばれたんだわ。そうは思いましたけれど、まさか救命ボートを奪って逃げるなんてアクション映画じゃあるまいし。

お姉さんに案内されたのは、船長室とかブリッジではなく、特等船室でした。ネイビーブルーの制服に金色の四本筋肩章を着けた船長さんが待っていました。

「ええとね……親御さんから連絡がありました。このまま、引き返してもらいます」

鹿児島に着いたら、二時間の停泊後に北下里島へ向けて出港します。島へ着くまで、この部屋で船旅を楽しんでください——だ、そうです。

そうですよね。携帯は圏外でも、船舶無線は常に通じています。どちらかの親からフェリー会社を通じて問い合わせがあったのか、女の子二人だけというのに不審を感じて船から問い合わせたのか。とにかく。フェリーに乗った時点で、家出は失敗していたわけです。

何か用事があったら、その電話機を使いなさい。そう言い残して、船長さんと女性パーサー（かな？）は、船室から出て行きました。つまり、二人して軟禁されちゃったのです。

まさか、ドアに外から鍵が掛かってるなんてないでしょ——と、ドアを開けてみたら。椅子に腰掛けて背を向けている、さっきとは別のお姉さんが通せんぼをしていました。

「何か、御用？」

「いえ、逃げようとしただけです」

皮肉なのか負け惜しみなのか、自分でも分かりません。すぐにドアを閉めました。

——本当に豪華なクルージングでしたわ！

カプセルの二等船室とは大違いのふかふかのツインベッド。アニメとチャンバラとラブロマンスとドンパチとあれとこれと、六本から選べる映画番組は大迫力の液晶画面で見放題でしたし、カラオケもあったし、ゲーム機も完備していました。バストイレも専用ルーム（さすがに狭かったです）だし、食事も船内レストランのランチより豪華でした。死刑囚の最後の食事を連想しました。

カラオケがあるくらいですから、室内の防音も完璧でしょう。でも、さすがに……ふたり別々に、それぞれのベッドでお行儀よく寝ました。なかなか寝付けませんでしたけれど。

そうして家出は、鹿児島での二時間の停泊を含めても、往復二十二時間の船旅だけで終わったのです。

ルリと愛ちゃんは、それぞれの親に引き渡されて——それきり卒業までずっと、会うこともありませんでした。愛ちゃんの一家は南城村へ引っ越して、その近くにある分校へ転校したということでした。

愛ちゃんが、どれだけ厳しい折檻をいただいたかは、知りません。

ルリは——宿題ボイコットのときより、もっと厳しい折檻をいただきました。お尻が無傷だったので、最初にお尻叩き、それからお灸をいただいたのです。

「クラスメートを扇動して宿題をボイコットしたかと思ったら、次は家出か。いったい、いつからおまえは、そんな不良になったんだ？」

土蔵で、父様と母様を前に全裸で正座して。ルリは、ひと言もありません。ルリが、こんなふう^いに悪いことをするようになったのは……姫子お姉様の厳しい修行折檻を見学して、痛いことや羞ずかしいことに憧れるようになってからですが。まさか、正直に告白するわけにもいきませんよね。

不貞腐れた反抗的な態度で、ますます厳しい折檻をいただくのを待つだけです。

ルリが俯いて黙っていると、父様はチツと舌打ちをなさいました。

「この前は、教鞭で打たれた上を革ベルトで打ったが、今日はあれくらいでは済まんぞ」

その言葉に竦みあがりましたが、ふっと疑問が湧きました。なぜ、二人が示し合わせて家出をしたか、その理由を父様はお尋ねになりません。どのような理由があっても人殺しは罪なのと同じで、家出はその事実だけで罪なのでしょうか。家のお金を盗んだわけでも、ナンパされたり、(船の中では)フシダラなことをしたわけでもありません。

「これで、折檻の筈を作りなさい」

目の前に、直径三十センチほどのボビンが転がされました。ボビンというのは、ミシンで使う糸巻のことです。その十倍サイズです。糸ではなくて……有刺鉄線が巻かれています。鉄条網に張り巡らせる、棘の突き出た針金です。ペンチも添えられました。

父様の指図に従って、有刺鉄線を素手で引き出します。五十センチくらいで切って、同じのを四本の束にしました。それから、束がばらけないように、片側の十センチほどを粗く巻き締めていきます。指にも掌にもプスプス突き刺さって、手が血まみれになりました。

この有刺鉄線の筈で、お尻を叩かれるのです。皮膚はズタボロに引き裂かれるでしょう。心臓が大きな手で握り潰されるような恐怖です。どれほど痛いか、想像もつきません。それよりも、せめてお灸痕くらいには傷が治ってくれるのでしょうか。その方が、いっそうの心配事です。

筈を作り終えて、両手で捧げて父様にお渡ししました。父様は、それを平然と、素手で握り締めました。ルリに与える苦痛の何分の一かを、共有してくださるのです。

ルリは折檻台に俯せになって、手足を伸ばしました。母様が、革バンドで手足を拘束してくださいます。

「おまえの友達も、かつてない厳しい折檻を受けている頃だ」

ルリも愛ちゃんも、港へ引き取りに来てくださったのはお母様だけです。一家の主人が、女子供の為にあたふたするのは見苦しいですから。でも、ここぞというときの折檻は——愛ちゃんは、やはりお兄様から折檻をいただくのでしょうか。実核をワニグチクリップで挟まれるより苛酷な折檻は……そこへのお灸くらいしか、ルリには思いつきません。

「十回の数え打ちとする。間違えたら、最初から数え直しだからな」

「はい……」

「数は増やさないと、おっしゃっているのよ」

母様が、厳しい声で指摘なさいました。数え打ちは、やり直すたびに回数が増えていくのが普通です。増やさないのは、温情でありお慈悲です。

「はい、ありがとうございます。ルリは、きちんと数え切ります」

しゅ、ビヂッ！

ルリの言葉が終わると同時に、一発目が振り下ろされました。

「いぎゃああっ……ひとつ！」

叩かれるショックは、ごく軽いものでした。でも、棘が肌を切り裂くのが、はっきりと分かりました。教鞭とも革ベルトとも異なる、稲妻のような鋭さの劇痛でした。

こんな酷い折檻をされている……そう思った瞬間、ギュウンと胸が捻じれる感覚がありました。快感なんかではありません。超過激な折檻をいただいている自分に、酔っている。そんな感覚でした。でも、もっと酔い痴れたいとは微塵も思いませんでした。

しゅっ、ビチイッ！

「ぎゃあああっ……ふたつ！ ごめんなさいっ！」

明らかに最初よりも強い打ち方でした。ビキキッと肌が引き裂かれました。

しゅんっ、ビッチイン！

「あがっ……みつつ！ 二度と二人おいたはしません！」

「ん……？」

父様の手が止まりました。

「なんだね、そのフタリオイタというのは？」

あああっ……！ 劇痛に我を忘れて、絶対に秘密にしておかなければならない遊戯のことを自白してしまったのです。

ルリは、咄嗟に考えました。女の子同士のフシダラな遊びを愛ちゃんと……こういうのを乳繰り合うと言うのだと、思い至りました。そんなことを知られたら、愛ちゃんもその

ことで折檻を増やされるでしょう。

「ルリが悪いんです！ 愛ちゃんのお兄様には言わないでください」

取り乱していたなどは、思います。でも、そのためにかえって核心を衝いていたのではないのでしょうか。愛ちゃんの『ご両親』ではなく、愛ちゃんの『お兄様』。

「だから、具体的には何のことだね？」

「……クリトリスを、お互いに刺激していたんです。指とか……お口で」

中途半端に隠し立てしても、追及されて、最後まで白状させられるに違いないと判断しました。

「ルリが仕掛けたんです。悪いのは、ルリです！」

ルリは、どれだけ折檻を増やされても構いません。愛ちゃんは護ります。

あいつは、俺のスケだ。そんな熱血少年恋愛漫画(?)の臭い台詞が、頭をよぎりました。

「つまり……」

革ベルトに拘束されて浅く開いているルリの脚の付け根に、父様の手が滑り込みました。

「こういうことをしていたというのだね？」

クリトリスを探り当て、にゅるんと皮を剥き上げて——父様は。爪の先でお灸痕を押し潰しました。

「いぎゃああああっ！ はい……ごめんなさい！」

熱いのか痛いのか分からない、とにかく凄まじいショックが腰の奥に突きあたって、尾底骨で反射して背骨を脳天まで奔り抜けました。

「ふむ。では、そのレズビアンごっこへのお仕置は、後で母様からいただきなさい。父様は父様で——手加減を無しにしてあげよう」

「はい！ ありがとうございます！」

そう言わないと、さらに折檻が厳しくなるのは、分かり切っていました。

しゅんっ、ビヂヂイッ！

「ぎゃあああつつ……！ よつつ！」

棘が肌を切り裂きながら滑るのが分かりました。これまでは、打つと同時に跳ね上げていた笞先を意図的に水平に引いたのでしょう。

しゅんっ、ビヂヂイッ！

「いたい！ ごめんなさい！ いつつ……ううううう」

嗚咽を漏らしました。

ひどい、ひどい、父様、ひどい。でも……悪いのは、ルリです。

しゅんっ、ビヂヂイッ！

「ごめんなさい、ゆるしてください……むつつ」

涙をぼろぼろこぼして泣き叫びながら、必死で数を数えます。

しゅんっ、ビヂヂイッ！

「ななっ！ 二度と家出なんかしません！ 愛ちゃんとフシダラな遊びはしません！」

しゅんっ、ビヂヂイッ！

「きひいいっ……！ やつつ！」

打たれた瞬間に目の前が真っ赤になって、黄色い星が飛び散ります。

しゅんっ、ビヂヂイッ！

「こ、ここのつ……！」

しゅんっ、ビヂヂイッ！

「とお！」

やりました。数え間違えずに十発を耐え抜いたのです。

でも、すぐに――母様からの折檻が始まります。

ルリは仰向けにされて、両脚を深く折り曲げられました。爪先が頭を越えて折檻台に押し付けられて、革バンドで縛られました。この当時も、『マングリ返し』という言葉はありました。親や先生に聞き咎められたら（ことに女の子は）、それだけでお尻叩きと『お立たされ』ですけれど。

頭を起こすと、有刺鉄線の筈で叩かれて引き裂かれて血まみれになったお尻が見えます。
ので、天井を見上げました。

母様がお灸の道具をルリの横に置かれました。クリトリスをほじくり起こして、包皮を剥き下げました。

あああ、また、ここにお灸を据えられるのです。厭です。乳首だろうと割れ目の中だろうと構いません。クリトリスだけは赦して……くださいました。

「同じところへ据えたら、神経を焼き切りそうですね。それでは、未来の旦那様がお可哀想ですから」

神経が焼き切れたら、痛くも気持ち良くも感じなくなります。レディースコミックでこっそり覚えた単語のひとつにマグロがあります。それでは、未来の旦那様が興醒め。痛くて泣いたり、気持ち良くて鳴いたりするのが殿方を悦ばせるのだと、ルリはひとつ賢くなりました？

母様は艾を米粒大に固めて……ひいひいひいっ！ お尻の穴のまわり、肛門の皺の上に据えられました。

「……………」

どれだけ熱く感じるか未知数なので、不安に苛まれながら黙っています。すくなくとも、乳首にいただくよりはましでしょう。乳首は、クリトリスや肛門と違って、人目に触れる機会が多いのですから。

ルリの小さな肛門のまわりを四つの艾が取り囲みました。

「分かっていますね。身動きして艾が落ちたら、倍の大きさにしますからね」

「はい……じっとしています」

出来るか出来ないか分からないことでも、約束をするしかありません。

母様ご自身は折檻をいただいたことはなくても、近隣の先輩お母様たちから熱心に学んでらっしゃいます。耐えられる限界はじゅうぶんに弁えてらっしゃると、ルリは信じています。

トレーニングでは、限界をちょっぴりだけ超えるところまで負荷をかけて、それで限界を引き上げていきます。だから、ルリは四連続のお灸も克服したし、有刺鉄線の筈も耐え抜いたのです。肛門へのお灸も、今のルリの限界を超えるかもしれません。でも、克服はできる……そう信じます。

母様が線香に火をお点けになりました。艾がひとつずつ、煙を上げていきます。

「くううう……」

一年前のルリでしたら、とっくに泣き叫んでいたと思います。でも、実核へのお灸を経験しました。それと比べると……両手を握り締め歯を食い縛ってれば、無様に取り乱すまでには至りません。

「あぐううう……ごめんなさい。二度と家出なんかしません。二人おいたもしません」

母様は、黙って聞いてらっしゃいます。かすかな煙を上げて燃え進む艾を、じっと観察してらっしゃいます。ルリがじゅうぶんに耐え抜くと判断なさったのでしょうか。燃え尽きるまで、艾を払い落としてはくありませんでした。

そして……アボロチョコほどもある大きさの艾を、お作りになったのです。

「……………?!」

折檻には、赦しても厭も通じません。駄々を捏ねればこねるほど、罰が厳しくなるだけです。

「家出へのお仕置は、さっきのお灸で赦してあげます。これは、女の子同士でフシダラな桃色遊戯をしたことへのお仕置です」

母様は唾で湿した指で、艾の底を緩く尖らせました。そして、尖った部分をお尻の穴へ捻じ込むみたいにして、艾をルリの肛門にお据えになりました。

米粒と小豆の違いは、身に沁みて知っています。アボロチョコが小豆の何倍も熱くて痛いことも、宿題ボイコットのときに——身体に焼き込まれています。あのときは、お尻でした。でも、今度は肛門……クリトリスと同じ粘膜です。

「母様……もっと、きつく縛ってください。口もふさいでください」

万が一にも(ルリの予想としては半々です)激しく藻掻いて艾を落とすのを怖れました。
我を忘れて、余計なことまで口走るのを怖れました。

「そうですか。瑠璃さんは案外と根性無しだったのですね」

なんと言われたって構いません。

追加の拘束は、父様がしてくださいました。拘束台の両脇の革ベルトで、お腹をぎちぎちに締め付けてくださいました。両手を脚の間から引き出して、左右に広げて拘束台の縁へ縛り付けてくださいました。両脚がガニ股に開きましたけれど、その分お尻も左右に分かれたので、艾が周辺に触れずに済みます。熱が肛門に集中するかもしれませんが、お風呂に入るときなんかでも、お灸痕は見えません。

口はふさいでくださいませんでした。父様も母様も、けっして娘を甘やかしてはくさいません。

カチッ……線香ではまだるっこしいとばかりに、ライターで点火されました。

大きな艾ですから、最初は熱を感じません。三分の一も燃え進んでから、ヂリヂリと熱くなってきます。

「ぐうううう……」

皮きりの灼熱が、肛門を突き刺します。

艾の先端はすでに灰になって、その下に赤く燃えている部分が微かに見えて、焦げた黒い部分がじりじりと下へ進んでいき、ついに艾の薄茶色を覆い尽くしました。凄まじい熱量が、肛門全体を貫きます。

「ぎびいゝゝゝゝゝゝ……熱い！ ごめんなさい！」

悲鳴と共に、鼻水が噴き出します。涙で視界が塗り潰されます。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！ ごめんなさい……！」

きっと、失神したのだと思います。意識を取り戻してからも、朦朧としていたのです。う。

いつの間にか、リルは反省のポーズで『お立たされ』をしていたのです。長い夏の夕暮

れも過ぎて、門灯に照らし出される白い裸身を、幻想的だなあと——幽体離脱したみたいに眺めていたのは本当の記憶だったか、定かではありませんけれど。

——答傷が落ち着くまでの三日間、ルリのお尻には大きなガーゼが貼られていました。でも、肛門の火傷は、それくらいでは済みませんでした。一か月ほどは、朝のお通じが塗炭の苦しみでした。

※続きは製品版でお楽しみください。